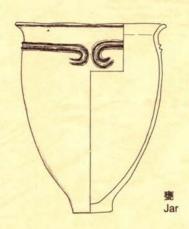
福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告

雀

居

8

福岡市埋蔵文化財調查報告書 第747集



2003 福岡市教育委員会

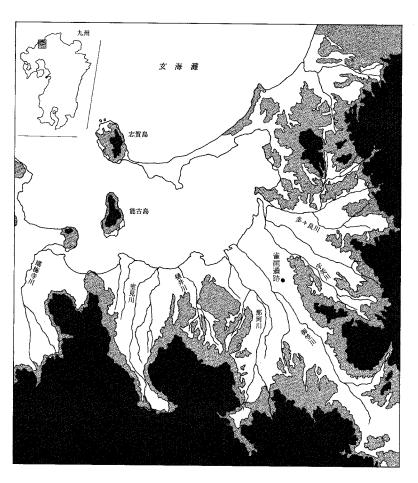
『雀居8』正誤表

E	行 Fig.	誤(斜体文字は修正指示)		正(太文字が修正部分)		
真				(公)		
П	16	(紡錘車) 1/2である。	持入	(初姓里) 、7月表記 1/2でのる。		
VIII		Fig. 353 SS02	3	「前班単」、青月級面1/2 Cのつ。 Fig. 353 SSO2、SSO3		
		Fig. 354 SS03	们上	F1g. 354 SSU4		
		CD化した。	神入	CD-R化した。		
5		タイトルの下に「赤線は下面水田を示す」の文字を挿入				
6		SF068、081~085の	SF068、 SF 081~ SF 085の			
L	下 5	SF083~085の		3 ~\$F 085∅		
		SF081~085の		1~ \$F 085∅		
ا " ا	21	SF081~085の	SF081∼ SF 085∅			
11	Fig. 14	スケールの下に挿入	(17~	-20はS=1/2)		
13	Fig. 18	遺物番号「26」右の木器の右下に「27」の文字を挿入				
14	Fig. 19	遺物番号「29」を「31」に訂正				
	7. 4	スケールの下に挿入	(11~14はS=1/2)			
17	Fig. 24	(縮尺1/2・1/4)	-			
	下4	タイプ註 1	削除	(MI) (27 3 x) 2)		
24		遺物番号「36」を「26」に訂正		<u> </u>		
25		スケールの下に挿入	(11+	S=1/2)		
26		スケールの下に挿入 遺物番号「26・24」下の土器の右下に「 25 」の文字を挿 <i>)</i>		V = 1/ £/		
40				S=1/2)		
30		スケールの下に挿入	(ठाउर	5-1/L/		
 		遺物番号「15」の脚部透かし孔内部を網ナシに訂正		OWO 1 - Litery /D		
34		SW01~03が古墳時代	持入	SW01~SW03が古墳時代 SW04~SW07が弥生時代		
		SW04~07が弥生時代				
36		スケールの下に挿入	(3は	S=1/2)		
38	Fig. 59	遺物番号「22」を「29」に訂正		<u> </u>		
折り込		木器番号に遺構略号を挿入	22(S	WO2) 11(SWO4) 12(SWO4)		
74		遺物番号「40」を「48」に訂正				
75	Fig. 111	遺物番号「58」の横断面図を木製品と同じ濃い網掛けに訂	Œ	`		
82	Fig. 191	各溝断面の右側レベル線上に「H=4.70m」の文字を挿入				
04	F18. 121	[図右側] 第11次調査	ب برد	第12次調査		
110	Fig. 164	[図中央右] 1号土壙墓	利业	第12次調査 SH01		
112			(8l#S	=1/2)		
116		遺物番号1の甕内の数字を削除	"			
117			(12)	‡S=1/2)		
119	Fig. 183	スケールの下に挿入		S=1/2)		
125		タイトルの下に「赤線は掘り下げの途中を示す」の文字を持				
		Cm ^T	打正	nen 7º		
134		遺物番号「57」を「58」に訂正	711			
105			(1.5	5はS=1/2)		
135	Fig. 217	スケールの下に挿入	_	t\$=1/2)		
141						
151		SW01~03Ø	持入	SW01~SW03∅ SW04~SW07∅		
		SW04~07の				
155		スケールの下に挿入	(15•	16はS=1/2)		
158		18行目以下を詰める	i.			
166		遺物番号「63」右の土器の右下に「64」の文字を挿入				
174		遺物番号「142」の断面図に断面印を挿入				
182	Fig. 293	遺物番号「5」内、右上図のアミを調ナシに訂正				
	4	11(P70-71 折り込み)は ,	訂正	11(P 62-63 折り込み)は		
188	Τε	「北九州市長行遺跡」以下の文章を改行				
1	下5	12は竪杵	挿入	12(P62-63 折り込み)は竪杵		
219	下2	O28グリッドで検出		Q28グリッドで検出		
	2	5 号円形溝SS05	計正	4号円形溝SS04		
		SS05は W		別に 4号目形得5504 SS 04 は		
			14.	Fig. 353 SS02•SS03		
		Fig. 353 SS02				
L	Fig. 354	Fig. 354 SS03	打止	Fig. 354 SS 04		

福岡市博多区

准 居 8

雀居遺跡第12次調査報告 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第747集



遺跡名	雀居遺跡	第12次調査	所 在 地	福岡市博多区	大字雀居正フリ川
調査番号	9715	遺跡略号	S A S -12	開発面積	31,000m²
調査対象面積	5,800m²	調査面積	5,800㎡×3面	調査期日	970508~980325

平成15年 福岡市教育委員会

序

九州の北端部に位置し、海に開かれた福岡市は、古くよりアジア大陸や半島の先進文化の門戸として、わが国の歴史上重要な役割を果たしてきました。市内には対外交流を示す遺跡が多く点在し、なかでも博多区板付遺跡はわが国における稲作発祥の地として、また中央区福岡城内にある鴻臚館跡は、奈良~平安時代の迎賓館として有名です。

現在の福岡市のゲートウエイは、博多港と福岡空港です。福岡空港は、国内32都市、海外21都市との路線を有し、全国第3位の乗降客数を誇っています。さらに航空需要が予想されることことから、運輸省(現国土交通省)は、福岡空港西側整備を進めることになりました。福岡市教育委員会では、この建設工事に先立って空港西側の地下に眠っている雀居遺跡の発掘調査を平成3年から着手し、平成10年第13次調査まで実施しました。各次調査とも新しい知見が掘り出され、考古学会だけでなく歴史ファンの注目を集めました。市民の高い関心に応えて福岡市埋蔵文化財センターと福岡市博物館で雀居遺跡に関する展示会を開催しました。

本書は、雀居遺跡第12次調査の報告書です。重要な遺構や遺物を発見しましたが、中でも弥生時代から古墳時代の多様な木製品が出土し、当時の農作業の様子や木工、建築技術を具体的に理解することができるようになりました。

調査から整理、報告に至るまで、運輸省第四港湾建設局(現国土交通省九州地方整備局)、特に福岡空港関係者の皆様にはご協力をいただきました。また発掘作業員、整理作業員をはじめとする数多くの方々からもご協力、ご指導をいただきました。心から感謝申し上げます。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、さらに学術研究の資料としても活用いただければ幸いです。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会 教育長 生 田 征 生



Fig.1 空から見た福岡市

例 言・凡 例

- 1. 本書は、国土交通省九州地方整備局(旧運輸省第四港湾建設局)による福岡空港内西側整備の建設工事に先だって実施した博多区雀居遺跡第12次調査の報告書である。
- 2. 検出遺構は、次のようなローマ字をつけ、遺物を取り上げている。本報告書では、遺構の内容が 分かるように遺構名称とローマ字2文字の記号(遺構名英文の略号ではない)とを併記して第1号 井戸SE01、第3号土壙SK003のように表し、各遺構番号は、各次で完結させている。なお各遺構 図は、次のような縮尺で統一している。

竪穴住居跡SC (1/60) 掘立柱建物跡SB (1/60) 土壙SK (1/40) ピットSP (1/40) 井戸SE (1/40) 甕棺墓SN (1/20) 木棺墓SA (1/20) 土壙墓SH (1/20) 溝SD (1/40) 窪地(凹地)SW (1/100) 土器溜SJ (1/80) 土器群SG (1/40) 方形周溝SR (1/60) 円形溝SS (1/40) 水田跡SF (1/400) 杭列SX (1/40) 流路SL (1/100)

- 3. 本書に掲載している地図、遺構図は、すべて磁北(真北より西に6度20分偏っている)のである。またグリッドの縦線は磁北より59度西に偏っている。
- 4. 遺物のうち石製品、木製品等については、遺物実測図の断面に網かけをしている。また実測図の基本縮尺は、土器、土製品、木製品1/4、石製品、土製品(紡鍾車)1/2である。また、木製品については測定数値(単位mm)を図に記入している。なお、出土遺構や遺構面ごとに通し番号としているが、各次に渡っての通し番号にはなっていない。
- 5. 実測した遺物についてはすべてを掲載したが、個別記述については十分でない。この欠を補うために観察表を別冊にしている。また、人類学、昆虫学、動物学など関連科学分野の先生方にも分析、研究をお願いし、その結果を別冊に収録している。
- 6. 遺構・遺物撮影、原稿執筆、割付、編集は、主に力武が当たり、古墳時代土師器については、西堂将夫調査員が担当した。発掘現場での遺構実測から資料整理の遺物実測、分類、登録、さらに報告書作成のトレースなどの各作業については、主に瀬戸啓治、北村幸子、羽方誠、境聡子、野田和美、西堂将夫調査員と分担して行った。また石製品の実測、作図、及び土器割付図のトレース業務のうち一部を外部委託した。
- 7. 木製品、漆製品、金属器、およびガラス製品など特殊遺物については、保存処理やクリーニング、 分析などを福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏と片多雅樹嘱託員にお願いした。
- 8. 英文要約の作成は林田憲三氏にお願いした。
- 9. 今回の発掘調査で得た出土遺物、実測図や写真などの記録類は、福岡市埋蔵文化財センター(福岡市博多区井相田2-1-9 ☎092-571-2921)に収蔵、保管する。誰もが検索し実見することが出来るので学術研究だけでなく、学校教育や生涯学習など多方面での活用を期待している。

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査にいたるまで	1
第2節	発掘調査の組織と構成	1
第2章	発掘調査の記録	4
第1節	調査の概要	4
第2節	グリッド設定と基本層序	4
第3節	第 I 面(古代~中世)の調査	5
	1. 水田跡 (SF) ····································	5
第4節	第Ⅱ面(弥生時代後期~古墳時代前期)の調査	18
	1. 遺構検出面の遺物	19
	2. 土器溜 (SJ) ····································	22
	3. 竪穴住居跡 (SC)	28
	4. 土 壙 (SK)、ピット (SP)	30
	5. 凹 地 (SW) ······	34
	6. 方形周溝 (SR) ····································	81
第5節	第Ⅲ面(弥生時代中期~後期)の調査	85
	1. 土器群 (SG) ····································	85
	2. 遺構検出面の遺物	88
	3. 土 壙 (SK)、ピット (SP)	110
	4. 土壙墓 (SH) ····································	149
	5. 凹 地 (SW) ····································	151
	6. 杭 列 (SX) ····································	218
第6節	第Ⅳ面(弥生時代早期~前期)の調査	
	1. 円形溝 (SS) ··································	219
第3章	おわりに	222
	1. 小 結	

12次挿図目次

Fig. 1	空から見た福岡市 I	Fig.39	SC01実測図(縮尺1/60) 28
Fig. 2	周辺の遺跡分布図(縮尺1/25,000)… 2	Fig.40	SC01全景 (北より)······ 29
Fig. 3	空から見た福岡空港 3	Fig.41	SC01の遺物 29
Fig. 4	土層柱状図(縮尺1/40) 4	Fig.42	SC01の遺物(縮尺1/4・1/2) 30
Fig. 5	水田跡全体図	Fig.43	SP0001の遺物(縮尺1/4) 30
Fig. 6	1 区下面水田跡実測図(縮尺1/400) 6	Fig.44	SP0001の遺物出土状況 30
Fig. 7	水田跡と流路(北西より) 7	Fig.45	SK030実測図(縮尺1/40) ······ 31
Fig. 8	2区水田跡(北西より) 7	Fig.46	SK030の遺物(縮尺1/4) 31
Fig. 9	1 区水田跡(南東より) 8	Fig.47	SP0158の遺物(縮尺1/4) · · · · · 31
Fig.10	1区下面水田跡と土手 9	Fig.48	作業風景
Fig.11	1区水田跡土手の断面 9	Fig.49	SP0485の遺物(縮尺1/4)32
Fig.12	北拡張区の畦畔断面 10	Fig.50	SP0485の遺物32
Fig.13	4 区水田跡(北西から) 10	Fig.51	SP0436の遺物(縮尺1/4) ····· 33
Fig.14	上面水田の遺物(縮尺1/4・1/2) 11	Fig.52	SP0436の遺物 33
Fig.15	上面水田の遺物(縮尺1/4) 12	Fig.53	SW01実測図(縮尺1/100) 34
Fig.16	上面水田の遺物 12	Fig.54	SW01 (南より) ······ 35
Fig.17	上面水田の遺物 12	Fig.55	SW01 (東より) ······ 35
Fig.18	上面水田の遺物(縮尺1/4) 13	Fig.56	SW01の遺物(縮尺1/4・1/2) 36
Fig.19	上面水田の遺物	Fig.57	SW01の遺物 37
Fig.20	上面水田の遺物	Fig.58	SW01の遺物(縮尺1/2) · · · · · 38
Fig.21	上面水田の遺物(縮尺1/4) 15	Fig.59	SW01の遺物 38
Fig.22	足跡	Fig.60	SW01の遺物 39
Fig.23	人形の出土状況	Fig.61	SW01の遺物(縮尺1/4) 39
Fig.24	下面水田の遺物 ((縮尺1/2・1/4) … 17	Fig.62	SW01の遺物 39
Fig.25	下面水田の遺物 17	Fig.63	SW01の遺物 40
Fig.26	第Ⅱ面検出作業18	Fig.64	SA01の遺物(縮尺1/4) · · · · · 41
Fig.27	第Ⅱ面検出作業18	Fig.65	SW01の遺物 42
Fig.28	第Ⅱ面遺構検出面の遺物 (縮尺1/4) … 19	Fig.66	木製品の出土状況42
Fig.29	第Ⅱ面遺構検出面の遺物 19	Fig.67	木製品の出土状況 42
Fig.30	第Ⅱ面遺構検出面の遺物 (縮尺1/4) … 20	Fig.68	SW01の遺物 43
Fig.31	SJ01検出作業 22	Fig.69	SW01の遺物 (縮尺1/4) 43
Fig.32	第Ⅱ面遺構分布図(縮尺1/400) 23	Fig. 70	SW01の遺物 44
Fig.33	SJ01の実測作業23	Fig. 71	SW01の遺物(縮尺1/4)45
Fig.34	SJ01の遺物 24	Fig.72	作業風景46
Fig.35	SJ01の遺物(縮尺1/4・1/2) 25	Fig.73	SW02実測図(縮尺1/100) 46
Fig.36	SJ01の遺物(縮尺1/4) 26	Fig.74	木製品の出土状況47
Fig.37	SJ01の遺物(縮尺1/4) 27	Fig.75	SW02の遺物 (縮尺1/4) ····· 48
Fig 38	SC01検出作業28	Fig 76	SW02の遺物 (縮尺1/4) ······ 49

Fig.77	SW02の遺物 49	Fig.117 S	SW03の遺物79
Fig.78	SW02の遺物(縮尺1/4) 50	Fig.118 S	SW03の遺物(縮尺1/4)80
Fig. 79	SW02の遺物 51	Fig.119 S	SR01土器出土状況 81
Fig. 80	SW02の遺物(縮尺1/4) ····· 52	Fig.120 S	SR01 (北西から)81
Fig.81	SW02の遺物(縮尺1/2) ····· 53	Fig.121 S	SR01実測図(縮尺1/60) 82
Fig.82	SW02の遺物 54	Fig.122 S	SR01 (北西から)83
Fig.83	木製品の出土状況 54	Fig.123 S	SR01の遺物83
Fig.84	木製品の出土状況 54	Fig.124 S	BR01の遺物(縮尺1/4)84
Fig.85	木製品の出土状況 54	Fig.125 第	第Ⅲ面の検出作業 85
Fig.86	木製品の出土状況 54	Fig.126 第	第III面遺構分布図(縮尺1/500) ····· 85
Fig.87	SW02の遺物(縮尺1/4) · · · · · 55	Fig.127 遺	遺物検出作業86
Fig. 88	SW02の遺物 56	Fig.128 S	SG01の遺物 86
Fig.89	SW02の遺物 (縮尺1/4) 57	Fig.129 S	。 GG01の遺物(縮尺1/4)86
Fig. 90	SW02の遺物 58	Fig.130 S	。 GG02の遺物(縮尺1/4) 87
Fig.91	SW02の遺物(縮尺1/4) 59	Fig.131 S	。 GG02の遺物87
Fig. 92	SW02の遺物 59	Fig.132 S	。 GO2の遺物 ······ 88
Fig.93	SW02の遺物(縮尺1/4) ······ 60	Fig.133 S	。 GO2の遺物(縮尺1/2)88
Fig. 94	SW02の遺物 61	Fig.134 第	第Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/4) … 89
Fig.95	SW02の遺物(縮尺1/4) 62	Fig.135 第	常Ⅲ面遺構検出面の遺物90
Fig. 96	SW02・SW04の遺物 (縮尺1/4) … 折込	Fig.136 第	毎Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/4) … 90
Fig. 97	SW02·SW04の遺物 折込	Fig.137 第	5Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/4・1/2) … 91
Fig. 98	SW02の遺物 63	Fig.138 第	5Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/2) 92
Fig. 99	SW02の遺物(縮尺1/4) · · · · · 64	Fig.139 第	5Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/2) 93
Fig. 100	SW02の遺物 ····· 65	Fig.140 第	専Ⅲ面遺構検出面の遺物 93
Fig. 101	SW02の遺物 (縮尺1/4) 66	Fig.141 第	5Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/2) 93
Fig. 102	SW02の遺物(縮尺1/4) ······ 67	Fig.142 第	5Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/2) 94
Fig. 103	SW02の遺物 ····· 68	Fig.143 第	95 □面遺構検出面の遺物 95
Fig. 104	SW02の遺物 (縮尺1/4) ····· 69		5Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/2) 96
Fig. 105	SW02の遺物 70	Fig.145 第	専Ⅲ面遺構検出面の遺物 96
Fig. 106	SW02の遺物(縮尺1/4) · · · · · 70	Fig.146 第	5Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/2) 97
Fig. 107	SW02の遺物(縮尺1/4) · · · · · 71	Fig.147 第	5Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/2) 98
Fig. 108	SW02の遺物 72	Fig.148 第	5Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/2) 99
Fig. 109	SW02の遺物(縮尺1/4) · · · · · 73	Fig.149 第	5Ⅲ面遺構検出面の遺物 99
Fig. 110	SW02の遺物(縮尺1/4) · · · · · 74	Fig.150 第	5Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/2) … 100
Fig. 111	SW02の遺物 (縮尺1/4) 75	Fig.151 第	5Ⅲ面遺構検出面の遺物 101
Fig. 112	SW02の遺物 76	Fig.152 第	5Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/2) ··· 101
Fig. 113	SW02の遺物 (縮尺1/4) ····· 77	Fig.153 第	5Ⅲ面遺構検出面の遺物 102
Fig. 114	SW03の遺物 (縮尺1/4) ······ 78	Fig.154 第	5Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/2) … 103
Fig. 115	SW03実測図(縮尺1/100) 78	Fig.155 第	5Ⅲ面遺構検出面の遺物 104
Fig. 116	SW03の遺物 (縮尺1/4) … 79	Fig.156 第	5Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/2) … 105

Fig. 157	第□面遺構検出面の遺物(縮尺1/4・1/2) … 106	Fig.197 SK019実測図(縮尺1/40) ·········· 123
Fig.158	第Ⅲ面遺構検出面の遺物 107	Fig.198 SK019の遺物 (縮尺1/4) ······ 123
Fig.159	第Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/2) … 108	Fig.199 SK021実測図(縮尺1/40) ········· 123
Fig.160	第Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/2) … 109	Fig.200 SK021の遺物 124
Fig.161	第Ⅲ面遺構検出面の遺物 109	Fig.201 SK021の遺物 (縮尺1/4) ······ 124
Fig. 162	第Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/2) … 109	Fig.202 SK024 ····· 124
Fig. 163	SK001 ····· 110	Fig.203 SK024実測図(縮尺1/40) ·········· 125
Fig. 164	土壙分布図(縮尺1/500) 110	Fig.204 SK024の遺物(縮尺1/4) ··········· 126
Fig.165	SK001土壙(縮尺1/40) 111	Fig.205 SK024の遺物 127
Fig.166	SK001の遺物(縮尺1/4) · · · · · 111	Fig.206 SK024の遺物(縮尺1/4) ··········· 128
Fig.167	SK002実測図(縮尺1/40) 112	Fig.207 遺物出土状況 129
Fig.168	SK002の遺物 112	Fig.208 SK024の遺物 129
Fig.169	SK002の遺物(縮尺1/4・1/2) 112	Fig.209 SK024の遺物(縮尺1/4) ······ 130
Fig.170	SK003·SK004実測図(縮尺1/40) ··· 113	Fig.210 SK024の遺物(縮尺1/4) ······ 131
Fig.171	SK003の遺物(縮尺1/4) · · · · · 114	Fig.211 SK024の遺物 131
Fig.172	SK004の遺物(縮尺1/4·1/2) 114	Fig.212 SK024の遺物 (縮尺1/4·1/2) ······· 132
Fig.173	SK005実測図(縮尺1/40) 115	Fig.213 SK024の遺物 133
Fig. 174	発掘作業風景 115	Fig.214 SK024の遺物(縮尺1/2) ······ 134
Fig.175	SK005の遺物(縮尺1/4) ······ 116	Fig.215 SK024遺物出土状況 134
Fig.176	SK006実測図(縮尺1/40) 116	Fig.216 SK026の遺物 (縮尺1/4·1/2) 134
Fig.177	SK006の遺物(縮尺1/4·1/2) 117	Fig.217 SK028の遺物(縮尺1/4·1/2) 135
Fig.178	SK006の遺物(縮尺1/4) ····· 118	Fig.218 SK029の遺物(縮尺1/4·1/2) 136
Fig.179	SK006の遺物 118	Fig.219 SK031実測図(縮尺1/40) ······ 137
Fig.180	SK007実測図(縮尺1/40) 119	Fig.220 発掘作業風景 (北拡張区) 137
Fig.181	SK007の遺物(縮尺1/4) ····· 119	Fig.221 SK031の遺物(縮尺1/4) ······ 137
Fig.182	SK008実測図(縮尺1/40) 119	Fig.222 SK032実測図(縮尺1/40) ·········· 138
Fig.183	SK008の遺物(縮尺1/4·1/2) 119	Fig.223 SK032の遺物(縮尺1/4) ······ 138
Fig.184	SK009実測図(縮尺1/40) 120	Fig.224 SK032の遺物 138
Fig. 185	SK009の遺物 120	Fig.225 SK035実測図(縮尺1/40) ·········· 139
Fig.186	SK009の遺物(縮尺1/4·1/2) 120	Fig.226 SK035の遺物出土状況 139
Fig. 187	SK011実測図(縮尺1/40) 121	Fig.227 SK035の遺物(縮尺1/4) ······ 140
Fig. 188	3 SK011の遺物(縮尺1/4) 121	Fig.228 SK035の遺物 140
Fig. 189	SK012実測図(縮尺1/40) 121	Fig.229 SK035の遺物(縮尺1/4·1/2)······· 141
Fig.190) SK012の遺物 (縮尺1/4) 121	Fig.230 SK036実測図(縮尺1/40) ········· 142
Fig. 191	SK013の遺物(縮尺1/4) · · · · · 121	Fig.231 SK036の遺物 (縮尺1/4·1/2) 142
Fig.192	2 SK014実測図(縮尺1/40) 122	Fig.232 SK036の遺物 142
	3 SK014の遺物(縮尺1/4) ····· 122	Fig.233 SP0253実測図(縮尺1/40) ······· 142
	4 SK016の遺物(縮尺1/4) ······ 122	Fig.234 SP0253の遺物(縮尺1/4) 143
	5 SK017の遺物(縮尺1/4) 122	Fig.235 SP0264実測図(縮尺1/40) ······· 143
Fig.196	S SK018の遺物(縮尺1/4) 122	Fig.236 SP0264 ····· 143

Fig.237 SP0264の遺物(縮尺1/4·1/2) 144	Fig.277 SW04の遺物
Fig.238 SP0264の遺物 144	Fig.278 SW04の遺物(縮尺1/4) ····· 170
Fig.239 SP0241実測図(縮尺1/40) ······· 145	Fig.279 SW04の遺物 171
Fig.240 SP0542実測図(縮尺1/40) ······· 145	Fig.280 SW04の遺物(縮尺1/4) ····· 171
Fig.241 SP0038実測図(縮尺1/40) ······· 145	Fig.281 SW04の遺物(縮尺1/4·1/8) 172
Fig. 242 SP0520実測図(縮尺1/40) ······· 145	Fig.282 SW04の遺物 (縮尺1/4) ····· 173
Fig.243 ピットの遺物 (縮尺1/4·1/2) 145	Fig.283 SW04の遺物
Fig.244 ピットの遺物 146	Fig.284 SW04の遺物(縮尺1/4) · · · · · 174
Fig.245 ピットの遺物 (縮尺1/4·1/2) 146	Fig.285 SW04の遺物(縮尺1/4) · · · · · 175
Fig. 246 ピットの遺物 (縮尺1/4) 147	Fig.286 SW04の遺物(縮尺1/4·1/2) 175
Fig.247 ピットの遺物 148	Fig.287 SW04の遺物(縮尺1/2) · · · · · 176
Fig. 248 甕棺墓、木棺墓、土壙墓分布図(縮尺1/400) · · · 149	Fig.288 SW04の遺物(縮尺1/2) · · · · · 177
Fig.249 SH01実測図(縮尺1/10)··········· 150	Fig.289 SW04の遺物(縮尺1/2) ······ 178
Fig.250 人骨の検出作業 150	Fig.290 SW04の遺物 179
Fig.251 SH01人骨出土状況 ······ 150	Fig.291 SW04の遺物 180
Fig.252 凹地分布図 (縮尺1/400) 151	Fig.292 SW04の遺物(縮尺1/4) ······ 181
Fig.253 SW04実測図(縮尺1/100) ·········· 152	Fig.293 SW04の遺物(縮尺1/4) ······ 182
Fig.254 SW04 (北西から) ······ 153	Fig.294 SW04の遺物 183
Fig.255 SW04 (北西から) ····· 153	Fig.295 木製品の出土状況 183
Fig.256 実測作業 ······ 154	Fig.296 SW04の遺物(縮尺1/4) ······ 184
Fig.257 西岸土層断面 154	Fig.297 SW04の遺物 184
Fig.258 遺物取り上げ作業 154	Fig.298 木製品の出土状況 185
Fig.259 南端の遺物出土状況 154	Fig.299 木製品の出土状況 185
Fig.260 SW04上部の遺物(縮尺1/4·1/2)… 155	Fig.300 SW04の遺物(縮尺1/4) 186
Fig.261 SW04上部の遺物 156	Fig.301 SW04の遺物 187
Fig. 262 SW04の遺物 (縮尺1/4) 157	Fig.302 SW04の遺物(縮尺1/4) · · · · · 188
Fig.263 SW04の遺物 (縮尺1/4) ······ 158	Fig.303 SW04の遺物 188
Fig. 264 SW04の遺物 (縮尺1/4) ······ 159	Fig.304 SW04の遺物(縮尺1/4) 189
Fig.265 SW04の遺物 (縮尺1/4) ······ 160	Fig.305 SW04の遺物 190
Fig. 266 遺物出土状況 161	Fig.306 SW04の遺物(縮尺1/4) 191
Fig.267 SW04の遺物 161	Fig.307 SW04の遺物(縮尺1/4) · · · · · 192
Fig.268 SW04の遺物 (縮尺1/4) ······ 162	Fig.308 SW04の遺物192
Fig.269 SW04の遺物 (縮尺1/4) ······ 163	Fig.309 SW04の遺物(縮尺1/4) ······ 193
Fig.270 SW04の遺物 (縮尺1/4) ······ 164	Fig.310 SW04の遺物(縮尺1/4) ······ 194
Fig.271 SW04の遺物 (縮尺1/4) ······ 164	Fig.311 SW04の遺物195
Fig.272 SW04の遺物 (縮尺1/4) ······ 165	Fig.312 SW04の遺物(縮尺1/4) ······ 196
Fig.273 SW04の遺物 (縮尺1/4) ······ 166	Fig.313 SW04の遺物(縮尺1/4) ······ 197
Fig.274 SW04の遺物 166	Fig.314 SW04の遺物(縮尺1/4) ······ 198
Fig.275 SW04の遺物 (縮尺1/4) ······ 167	Fig.315 SW04の遺物 198
Fig 276 SWO4の遺物 (縮足1/4) 168	Fig 316 SWO4の遺物190

Fig.317	SW04の遺物(縮尺1/4) ······ 200
Fig.318	SW05実測図(縮尺1/100) 201
Fig.319	SW05 (東から) ······ 201
Fig.320	SW05の遺物 202
Fig.321	SW05の遺物(縮尺1/4) ····· 202
Fig.322	SW05の遺物(縮尺1/4) ····· 203
Fig.323	SW05の遺物(縮尺1/2) ····· 203
Fig.324	SW05の遺物(縮尺1/4) ····· 204
Fig.325	SW05の遺物(縮尺1/4) ····· 205
Fig.326	SW05の遺物 ······ 205
Fig.327	SW06実測図(縮尺1/100) ······ 206
Fig.328	臼の出土状況207
Fig.329	SW06 (東から) ······ 207
Fig.330	SW06の遺物(縮尺1/4) ····· 208
Fig.331	SW06の遺物(縮尺1/4) ····· 209
Fig.332	SW06の遺物 209
Fig.333	
Fig.334	SW06の遺物 210
Fig.335	SW06の遺物(縮尺1/2) ····· 211
Fig.336	SW06の遺物(縮尺1/2) ····· 212
Fig.337	SW06の遺物 213
Fig.338	SW06の遺物(縮尺1/4) ····· 214
Fig.339	SW06の遺物(縮尺1/4) ····· 215
Fig.340	SW07検出作業(南から) ····· 216
Fig.341	SW07の遺物 216
Fig.342	SW07実測図(縮尺1/100) 216
Fig.343	SW07の遺物(縮尺1/4) ····· 217
Fig.344	作業風景 (西から) 217
Fig.345	SX01杭列 ······ 218
Fig.346	SX01杭列断面 218
Fig.347	SX01杭列実測図(縮尺1/40) 218
Fig.348	円形溝分布図(縮尺1/300) 219
Fig.349	SS01実測図(縮尺1/40) · · · · · 219
Fig.350	SS02·SS03実測図(縮尺1/40) 220
Fig.351	SS04実測図(縮尺1/40) · · · · · 220
Fig.352	SS01221
Fig.353	SS02 221
Fig.354	SS03221

第1章 はじめに

第1節 調査にいたるまで

昭和19年(1944)旧陸軍は、北部九州の防衛目的で席田(むしろだ)、月隈、上臼井と筑紫郡那 珂町地区に渡る約254万㎡で席田飛行場建設に着手した。昭和20年8月15日の終戦後、11月25日 に米進駐軍が接収し板付基地としてスタートする。翌昭和21年1月には月隈丘陵の山間部約82,500 ㎡が航空機機銃射撃演習用地として接収され、さらに翌昭和23年には約225万㎡が給水タンク、弾 薬庫として追加接収された。昭和26年(1951)には国内線が開設され民間飛行場となり、昭和47 年(1972)3月31日に板付基地が返還されるまで長く米軍の基地として使用されてきた。翌日の4 月1日付けで福岡空港の供用開始が告示され今日に至っている。

アジアの玄関口としてますます役割が増している福岡空港は、博多港湾空港工事事務所平成12年 資料によると航空路線網は国際線21都市、国内線32都市を結んでおり乗降客数約1,970万人、航空 機発着回数は139,950回に達している。さらに新福岡空港調査会によると2025年には発着回数は 18万~19万回、乗降客数は3,000万人を突破すると試算され、ここ数年で空港機能が飽和状態にな ると予想されることから、運輸省第四港湾建設局(現 国土交通省九州地方整備局)は国際線ターミ ナル、駐機場 (エプロン)、国内、国際貨物などの各施設を空港西側に移動する「福岡空港西側整備」 を計画した。この計画を受けて埋蔵文化財課では、平成3年(1991) 6月15日~8月3日、西側全 域において39か所の試掘トレンチ(全長3,250m)を設け遺跡の確認調査を行った。

この結果、整備計画予定地の3か所で遺構、遺物が集中することを確認し、字名から雀居遺跡群と 名付けた。その後協議を重ね、年次的計画を立て平成3年10月から発掘調査に着手し、平成10年第 13次調査まで継続した。このうち国際線ターミナルの南側約300mのPOL(燃料タンク)用地では、 平成8年から3か年に分けて約10,500㎡を発掘調査することとした。第12次調査は、平成8年の第 10次調査に引き続き、その西側約6,000㎡を対象地として平成9年5月から11か月間で発掘するこ とになった。

第2節 発掘調査の組織と構成

調査委託 運輸省第四港湾建設局(現 国土交通省九州地方整備局)

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 西憲一郎

調査総括 福岡市教育委員会 埋蔵文化財課

> 課長 荒巻輝勝 調査第2係長 山口譲治

事前審査係 松村道博 田中壽夫 榎本義嗣 長家伸

調査庶務 小森彰 調査担当 力武卓治

発掘調查員 瀬戸啓治 北村幸子

発掘作業員 池田省三 池田福美 石屋四一 岩永嘉雄 梅崎元 浦伸英 江口毅保 榎田信一

越智信孝 大谷政道 尾花憲吾 甲斐康完 蒲池雅徳 亀井薫 木原保生 堤篤史

川井田明 真田弘三 黒木良太郎 高着一夫 河野一一 島津明男 白鬚元気

楠林司朗 古林茂夫 酒井次憲 志堂寺堂 柴田博 高嶋章浩 田上智雄 玉田重人 豊丸秀仁 中尾良蔵 中川祥一 長野嘉一 野田淳一 西川譲 二宮白人 三浦力

野村道夫 羽岡正春 萩尾政士 早川章 平井武夫 脇坂勇 松永七郎 福田幹雄 吹春憲治 別府俊美 前山正義 松永正義 安高精一 山田正治 吉田博明 吉住政光 吉原琢 吉峰勤 阿部幸子 穴井加菜子 石川洋子 金子二三枝 伊藤美伸 石本理香 岩本三恵子 江嶋ヒサ子 内山和子 大端由美子 古賀典子 川井田ムツ子 草場博子 桑原美津子 小島キサ 小松冨美 幸田信乃 世利陽子 澄川アキヨ 田原キヌエ 塚本よし子 砥板春美 西山裕子 林田和子 西田文子 中川原美智子 福場真由美 中野裕子 中村フミ子 鍋山治子 松浦滋子 林厚子 福田美星 松尾文江 藤原道子 松岡芳枝 藤野トシ子 播磨千恵子 富田千栄子 水田ミヨ子 村田理恵 森田祐子 持丸玲子 捩川ゆかり 森教子 脇坂サツキ 渡辺淑子 安高久子

(九州大学) 金宰賢 大森円 益原祐介(福岡大学) 羽方誠 (東京大学) 塚本浩司 田野裕之(早稲田大学) 野口未幾 篠原律子 (沖縄国際大学) 縄田雅重

室内作業員 清水啓子 山野祥子 生垣綾子 桑野正子 市川緑 安部国恵 大神真理子

整理調查員 坂本幸子 境聡子 羽方誠 西堂将夫 野田和美

整理作業員 池田由美 宮崎まり子 渡辺敦子 柴田志乃 生垣綾子 城後渡 藤元香子 岩隈香欧里

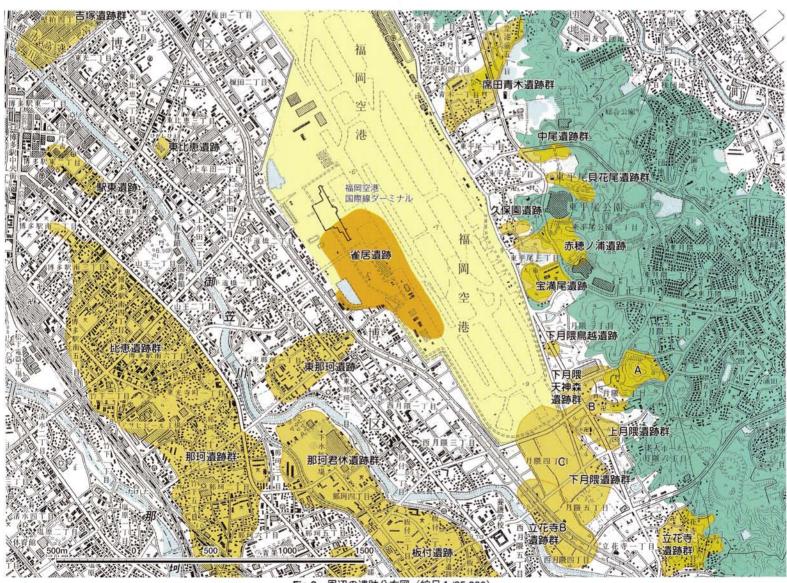


Fig.2 周辺の遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)



Fig.3 空から見た福岡空港

第2章 発掘調査の記録

調査の概要 第1節

第12次調査対象地の試掘は平成7年5月31日と6月21日の2日間実施し、この試掘所見を基に第 四港湾建設局と協議を重ね、発掘対象面積、調査期間、予算などを決めた。この協議と並行して第7 次、9次調査が実施されており、この調査成果を合わせて第10次の調査計画を立て、発掘の方法や 確認すべき狙いを定めた。この間の経緯については第10次調査の報告書に記述している通りである。 しかしながら綿密な試掘調査を実施しても、実際の発掘調査では予想が外れる事もあれば、意外な遺 構や遺物を検出、発見することもある。また長雨や日照り、そして思わぬ湧水に発掘作業の中断を余 儀なくされる事も起こる。このように予測できない状況下で当初の発掘目的を達成し、期日通りに調 査完了するには、事前審査係や開発側など関係組織のバックアップと実際に発掘作業に従事する発掘 作業員の協力なしにはとうてい不可能である。しかも発掘作業は埋蔵文化財の記録保存という目的が 第一ではあるが、発掘作業員の安全衛生を確保、命を守ることが最優先である。働く条件が揃わずま た安全意識が欠如した環境下での発掘作業は、事故が多発するとともに学術的な水準が保てず、いた ずらに遺跡を破壊、消滅するだけである。そこで絶えず発掘作業員と安全作業を確認しながら発掘の 目的を追求するために、第10次調査から始めた「雀居遺跡週刊ニュース」発行を再開し、雀居遺跡 の取り組みなど最新情報を関係者に配布、発信するようにした。今回報告書を発行するに当たり編集 を仕直してCD化した。調査の経過、あるいは各遺構、遺物発見時の様子や問題点、さらに安全確保 の実践などを記録している。調査概要については、週刊ニュースに譲りここでは略した。

第2節 グリッド設定と基本層序

第10次調査中に第11次調査として国際線ターミナル部の発掘調査を実施した。このため今回は次 数が飛んで第12次になっているが、発掘区は第10次調査区の西側に当たる。このためグリッドは第 7. 9次調査からの5mグリッドを踏襲し、これまで検出した遺構の広がりや各遺構との関係が分か るようにした。ただし、起点となる第7次調査区からは遠く離れアルファベット26文字を超えると いう不都合も生じた。

基本層序は、発掘区が西側隣接地であることから大きな違 いはなく、各遺構面の捉え方も共通している。ただ第Ⅲ面の 黒褐色粘質土、第Ⅳ面の青灰色粘質土は、調査区の南半分に は見られない。従って遺構も希薄になり、自然作用でできた 凹地が大部分を占める。生活空間から外れ、大量の不要遺物 が廃棄され、豊富な水量に守られて多様な木製品が保存され ていた。図示した柱状土層図はO34グリッド北壁で、自然 流路東岸に当たり、水田跡の土手が観察できる。

- **土層名** 1. 表土 2. アスファルト 3. バラス 4. 褐色砂質土
 - 5. 黄褐色粘質土 6. 明褐色砂質土 7. 暗青灰色シルト
 - 8. 暗灰色砂質土 9. 粗砂層 10. 明褐色粘質土
 - 11. 明褐色粘質土 (第Ⅰ面) 12. 灰黒色粘質土 (第Ⅱ面)
 - 13. 黒褐色粘質土 (第Ⅲ面) 14. 青灰色粘質土 (第Ⅳ面)
 - 15. 茶褐色砂質土

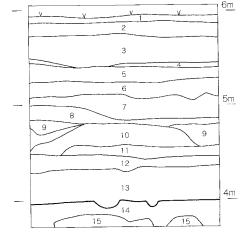
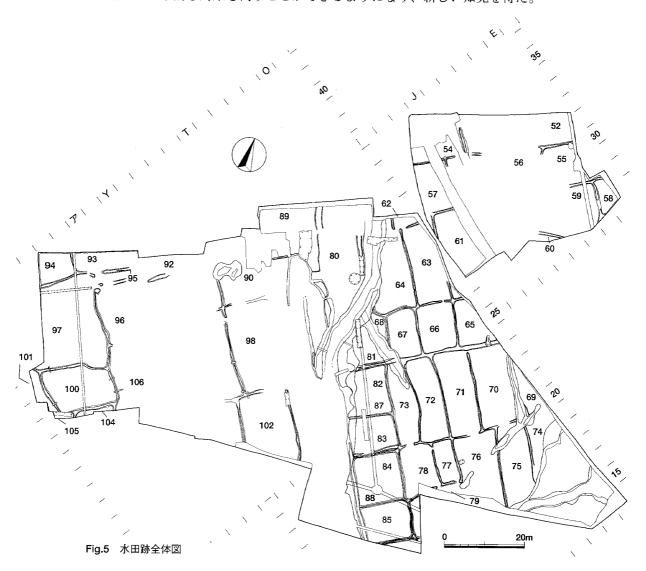


Fig.4 土層柱状図(縮尺 1/40)

第3節 第1面(古代~中世)の調査

1. 水田跡 (SF)

前年の第10次調査では、計18枚の水田跡を検出、確認した。厚い砂層に覆われて畦畔、水口、水尻などがよく残り、各水田の区画法や面積、水掛かりなどを知ることができ、西側に当たる第12次調査区での様子もある程度予測が立った。第10次から第13次調査の全面積は9,000㎡であるが、検出した水田跡の概要、各水田跡の計測値などについては、雀居ムラのガイド・データーブック『雀居遺跡6』や第10次調査の報告書『雀居遺跡7』に掲載している通りである。第12次調査では、前年検出した畦畔からの延長を探すために第10次調査区側に数m入り込んで調査区をダブらせた。前年の経験から砂層が堆積している表土下約120cmの砂層までパワーショベルで掘り下げたところ、予想通りに東西方向の畦畔がさらに西側に延び、直交する南北方向の畦畔も現れ、第10次調査区と同じように規格性のある水田区画が施行されていることが分かった。しかし1区とした東西約18m幅の発掘区西端では自然流路が南から北に走り、一部水田が流失していたことから2区より西側では御笠川寄りとなるために水田跡確認は期待できないのではと心配した。結果的には発掘区西端の4区でもSF101のように畦畔で区画された水田跡が見つかり、発掘区外にまだまだ拡がっている事を確認できたのは、第12次調査の成果の一つに上げていいだろう。またSF087、SF088の下に埋まっている4枚の水田を確認したことは、水田区画の変遷、特にこの水田が自然流路に面していたこともあり、洪水に対して講じた土木的な対策を伺うことができるようになり、新しい知見を得た。



上面の水田

第12次調査区は空港整備工事に合わせて対象地を東から東西にほぼ4等分して東の1区から発掘している。下面の水田跡は第10次調査区接する1区に限って検出したもので他区では検出できなかった。もともと存在しなかったのか十分な検討が必要である。ここでは上面水田と言う場合、第10次、

12次、13次で発掘した水田跡全体を指している。従っ て水田跡の全体図は上面水田跡を合成して作図してい る。その全体図によると水田跡は第10次調査区と第12 次調査1区が最も残りがよく、他は畦畔が途切れ、残っ た畦畔も直線的ではなく微妙に蛇行している。しかし断 続し、蛇行する畦畔も第10次調査区の畦畔方向である N-58°-Wと大きなズレはない。言い方を変えると むしろその規制、ルールに従って水田区画を工夫したか に見える。ただこの約束事を完全に無視したのが自然流 路SL01である。1区西端で見つかった砂層の落ち込み はSF087、SF088の西畦を押し流し、SF067から東に やや向きを変えて湾曲し、さらにSF080を斜めに横切 り発掘区外に出ている。この流れがなかったとすると、 第10次調査区から西に向かって残っている畦畔の位置 を考慮して水田区画を割り付けると、1枚の幅は等間隔 にはならないものの無理なく復元が可能である。従って 流路が人工的なものではなく洪水などの予期せぬ事態で 出現した、水田を流失させたものであることは疑いない。 ところがSF67西側に当たる流路中には十数本の丸太杭 が打ち込まれ、流れを安定、制御したような工作があり、 一定期間は流れがあった可能性も考えられた。この可能 性は下面水田の検出で決定的となった。

下面の水田

第回面に掘り下げ前に上面水田跡の耕作土や畦畔の土層断面の観察を行ったところ、耕作土下に薄く砂層が堆積し足跡状の落ち込みもあることから、もう1面水田が埋没している可能性が高まった。慎重に掘り下げるとSF068、081~085の計6枚の水田跡が現れた。SF067の下にSF068とSF081、SF087の下にSF082とSF083が、SF088の下にSF084とSF085のように上面水田を南北に二分する形状である。しかもSF083~085には流路に面する西側の南北畦畔が残っており、しかも流路に対する土手として機能するように高く盛り上げている。この対岸の土手は2区のSF102東付近にあるはずだが残っていなかった。ただSF080の西側畦畔は幅広くなっ

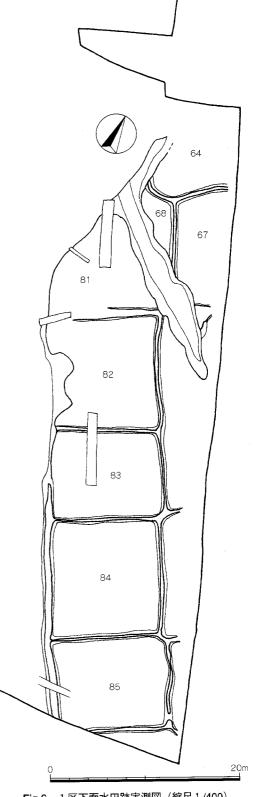


Fig.6 1区下面水田跡実測図(縮尺1/400)



Fig.7 水田跡と流路(北西より)



Fig.8 2区水田跡(北西より)



Fig.9 1区水田跡(南東より)

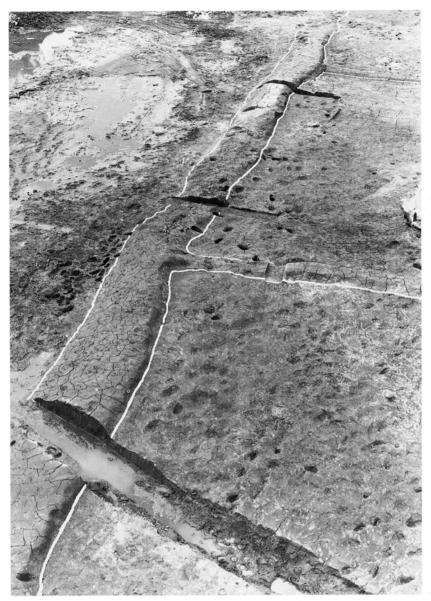


Fig.10 1区下面水田跡と土手



Fig.11 1区水田跡土手の断面

っており、対岸土手の可能性が高い。土手状の畦畔は、水田と同時に流れがあったことを如実に示しているが、この流路も結局は調整不能となる。ある時の洪水がSF083、SF082の土手を流し、SF081、SF064を斜めに貫通し、結局水田を覆った大量の砂を取り除く事はできず上面の水田に作り替えるような被害となった。

SF081~085の方形に近 い水田区画(SF084は157㎡) は、流路に面した特別な区画 だったのだろうか。水田跡全 体図をもう一度見ると南北方 向の区画は長方形、方形の繰 り返しであることに気が付く。 なぜ長方形区画の連続でない のか疑問だったが、SF081 ~085のように当初は方形区 画を基本としていたが、洪水 や農作業の効率化など諸条件 によって面積の拡大化が図ら れたのではないかと推測した。 依然として方形区画が残って いることの説明にはなってい ないが、いずれにしても洪水 は防ぎようがなく、いや洪水 に果敢に立ち向かった農民の 姿を発掘した水田区画に読み とることができよう。



Fig.12 北拡張区の畦畔断面



Fig.13 4区水田跡(北西から)

上面水田・流路の遺物 ここでは上面の水田跡、及び流路から出土した遺物について記す。水田面にはりついている遺物は少なく、ほとんどが水田面を覆う砂層から出土している。砂層も細かく見ると上部に粒子の大きい粗砂があり、その下部は灰色をしたシルト状になっている。滞水する時間があり、この間に粒子が小さい砂粒や泥が下に沈殿しシルト化したのであろう。ここから木製品や種子などが出土するが、十分な水分が保たれ植物質の保存に役立ったようである。水田耕作土の下には古墳~弥生時代の第Ⅱ、Ⅲ面が続き、耕起作業で相当な遺物が混じったはずだが、水田耕作土には遺物は皆無に近い。よほどこまめに異物(遺物)を取り除いたものと思われ、まったく感心させられる。なお米軍基地時代の排水管が水田面まで達し、上部からの攪乱もあり中世以降の遺物も混入しているが、砂層以下から出土した遺物についてはできる限り取り上げ、実測、図化するように努めた。

土器・土製品 1は口径4.7cm、貝殻文を型押し成形で表現した紅皿。江戸後半の磁器なので明らかに上部から混入した遺物である。2は管状土錘。長さ4.15cm、中央の径1.75cm。表面をナデ調整している。3~6は古墳時代土師器。3は口径10.9cm、半球状で小さな丸みのある底部が付く。口縁部は細丸でおさめる。4はSL01東岸出土。口径9.5cm、口縁部は手捏ねで波打つ。5は口径12.7cm。SL01東岸出土。三角形に開き口縁部となる。底部付近は叩き。6は高坏脚部。底径10.6cm、SL01の東岸で出土。裾部に二つの小孔がある。7~11は須恵器。7は坏身。受け部は上方に上がり、内傾する体部は端部で小さく外反する。8は坏身。受け部は短く水平に近い。口縁部は中位でわずかに湾曲

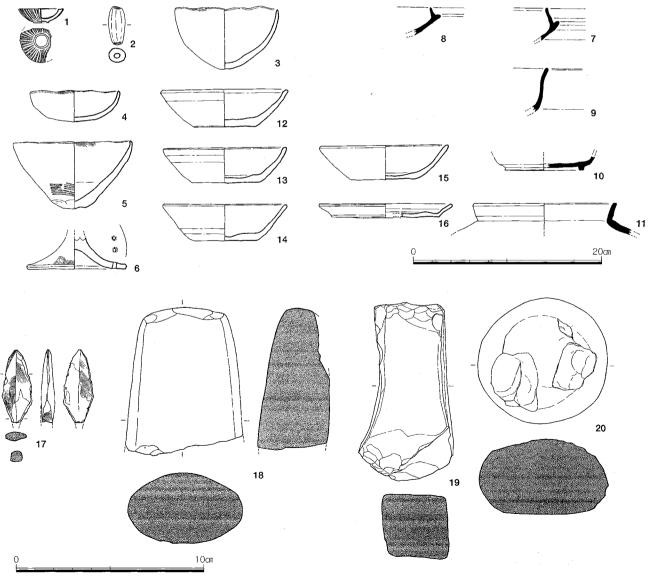
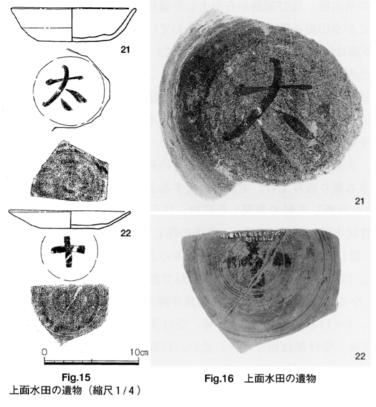


Fig.14 上面水田の遺物(縮尺 1/4・1/2)



ナデ調整。10は高台付き坏身。 高台径8.2cm。断面方形の高台は 屈曲部より内側に貼り付けてい る。11は壺。口径15.2cmで口縁 部は直線的に外に開く。回転横ナ デ調整。12~15は土師器の坏。 13は回転ヘラ切り離し。口縁端部 でわずかに内湾している。口径 13.1cm、底径7.2cm、器高3.7cm。 体部は回転ナデ調整。内底は回転 ナデの後にナデを加えている。14 は回転ヘラ切りの底部から直線的 に延びて口縁部を作る。口径 13.2cm。SL01川底出土。**15**は口 径13.7cm、底径7.1cm、器高3.6 cm。SL01東岸出土。底部は回転 ヘラり離し。外面に黒斑。

が変わる。9は4cmの破片。回転

16は土師器の皿。口径14.2cm、底径 11.4cm、器高1.5cm。SL01の川底から 出土。器面はやや摩耗しており、底部は へラ切りであろう。

石製品 図示した4点のうち19以外は SL01から出土した。17は磨製石鏃。身の鍋は鈍い。関は斜めに切り込み断面方形の茎となる。18はSL01東岸から出土した磨製石斧。長さ7.9cm、幅6.15cm。19は砂岩を用いた砥石。断面方形の3面を研ぎ面として使用している。20は丸石の表面が一部欠けているが滑らかになっており磨り石か。

墨書土器 21はSL01出土。土師器坏の 底部に達筆で「太」を墨書している。口 径13.2cm、底径7.7cm、器高3.55cm。

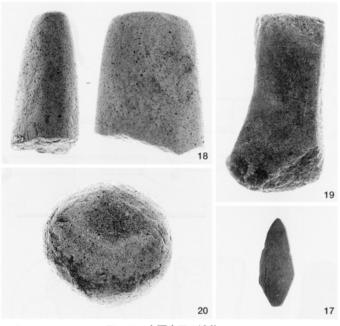
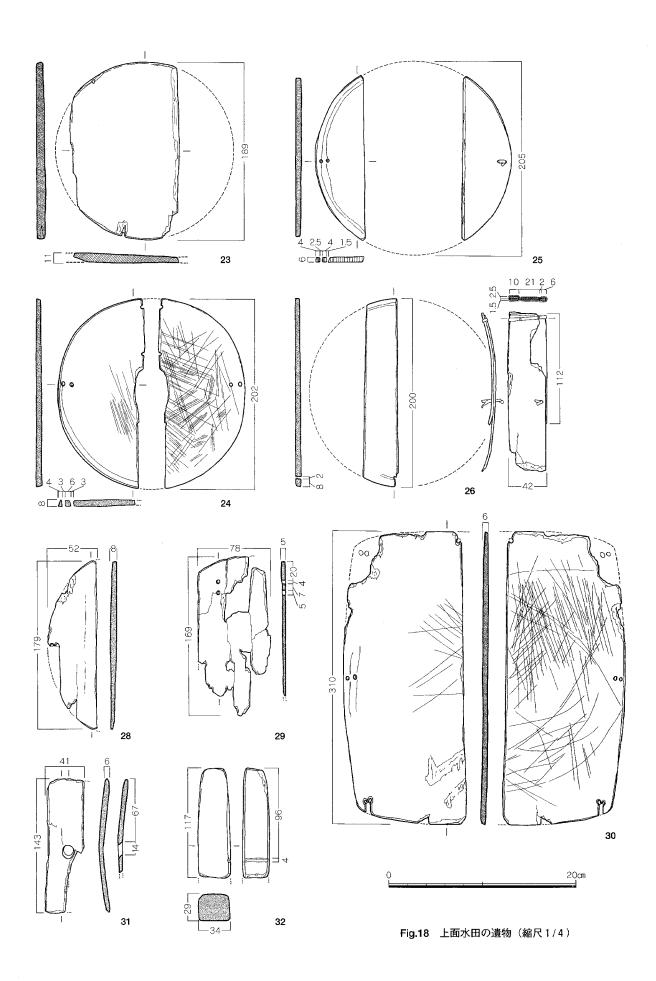


Fig.17 上面水田の遺物

底部は回転へラ切り後にナデを加えている。雀居遺跡では13次の調査で数点の墨書土器が出土しているが、「太」字例はない。福岡空港南側で発掘調査を継続している下月隈C遺跡では類例が出土している。22は口径12.7cm、器高1.9cmの土師器坏。底部の墨書は「十」と読める。底部は回転ヘラ切り離し。体部は直線的に大きく開く。



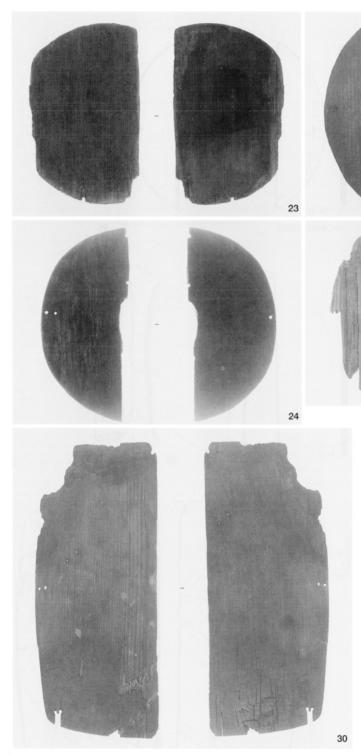


Fig.19 上面水田の遺物

木製品 曲げ物はよく類似するものが多 いことから上、下面合わせて報告する。 23は下面出土。針葉樹の柾目材を使った 曲げ物の底板か。2か所に木釘の差し込 み孔がある。側縁は削り加工。24は下面 出土。直径20.2cm。曲げ物の底板か蓋。 側板連結の二つ並んだ孔に対して別の孔 が2個見られる。左図(内面)には側板 の位置を決めるための針書き線が残る。 内面の一部と外面の全面に細かな刃傷が 多い。25は下面水田出土。直径20.5cm、 内面には側板を当たっていた部分が元の 色を残している。側板と連結していた樹 皮も残っている。26と27は同じ曲げ物の 部材。26は底板 (蓋) で側板との結合孔 が一か所見られる。側板が当たっていた

25

部分は色調が異なる。27は側板。底板(蓋)との結合孔が一か所ある。また側板の重なり部分の結合 箇所が残る。側板の結合は三段内綴じである。側板の重ねは、外側板の先端から約4cmの内側を削っ て薄くする。28は曲げ物の蓋か底板。側板との綴じ孔が一箇所に2個ある。側板よりはみ出すタイプ。 29は楕円形曲げ物で柾目材を使用する。腐食が激しく表面の加工痕は不明。30は方形曲げ物で針葉樹 の柾目材使用。側板が当たった部分が元の木肌色を残していることから、内外面の判別ができる。内 外面とも刃傷がおびただしい。特に外面は俎板のように使用した結果であろう。 31は下面水田出土。板状で縦に湾曲している。中央の孔は節の抜け落ちとも考えられる。用途不明。32は下面水田出土。針葉樹の柾目材。方柱形の木製品。表面は滑らかに加工しており、1面に浅い溝を入れている。33はSL01西側の黒色粘質土より出土。針葉樹の板目材。幅約1 cmの角棒状で、径1 cm程の孔が2か所にある孔は貫通していない。34は8字形の薄い板材で二つの孔も揃っている。丁寧な削り加工だが図裏面は剥離している。用途不明。組合せの部材か。35は木簡。ただし墨書はない。4区の水田面出土。針葉樹の柾目材、文字がないのは削られたか。頭部はやや角張った楕円形に近い。括れ部は上下から台形状に削り込まれている。紐で結んだ痕跡はない。36は板目材を薄くした斎串。

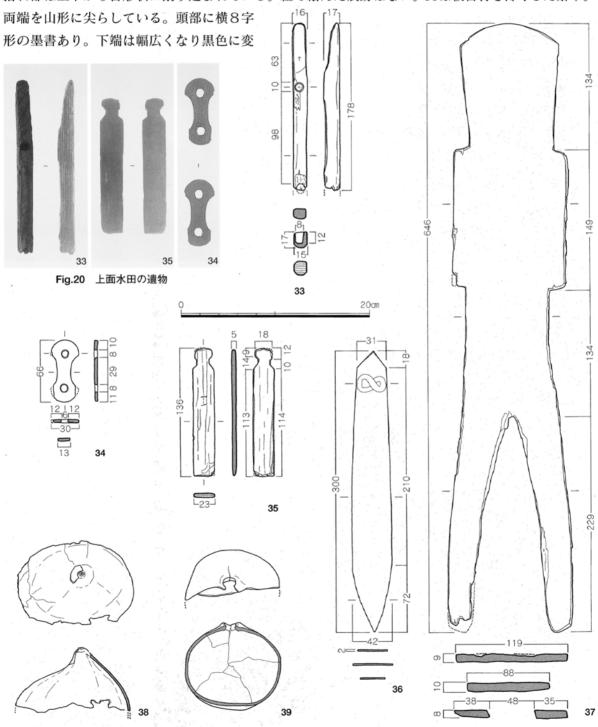


Fig.21 上面水田の遺物(縮尺1/4)

色している。37はX22グリッド、SF084上面出土。2本の脚が最初に出て二又鍬と判断したが、まったく思いもしなかった人形であった。全長65.0cmで簡略だが頭部、胸部、腹部、脚部の表現がバランスよく表現されている。また側面の加工も特に丁寧ではないが、そつなく仕上げている。福岡市内での人形は、博多区下月隈C遺跡、博多区高畑遺跡、西区吉武遺跡で出土しているが、その中でも最も大型である。その形状は奈良県平城京跡東三坊大路側溝出土の人形(112.7cm)と相似形に近い。公的な祭祀に使われた人形が、なぜ水田地帯と思っている雀居遺跡から出土するのか。先の木簡や斎

串と合わせて興味深い。38、39 は下面水田出土。木製品ではなく、 ヒョウタンである。38は上半部。 39は縦に半分が残っている。



Fig.22 足跡

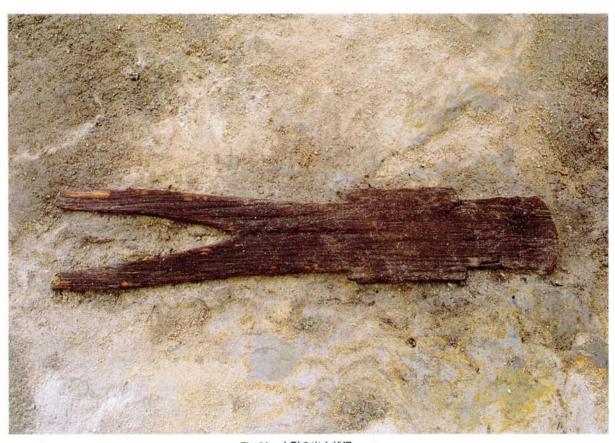


Fig.23 人形の出土状況

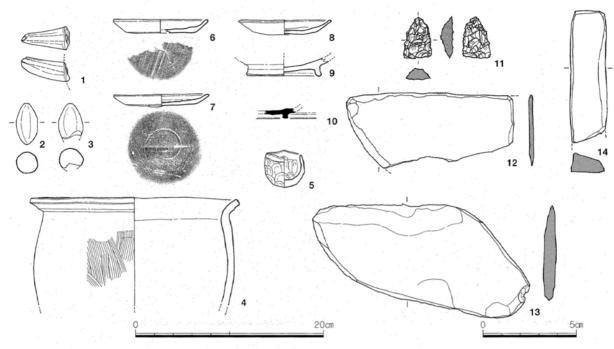


Fig.24 下面水田の遺物 ((縮尺1/2・1/4)

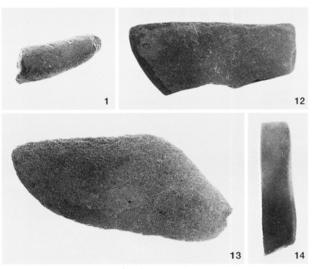


Fig.25 下面水田の遺物

下面水田の遺物 下面水田の遺物として10点 の土器と3点の石器を実測、図示した。

土 器・土製品 1は注口で、体部との接合部で離脱している。白褐色で下部には黒斑がある。2は楕円形の投弾。長さ4.35cm、中央部の断面は正円に近く最大幅2.15cm。3も投弾。一端が欠けている。断面はややいびつな円形。最大幅2.6cm。色調は黒褐色。4は口径22.1cmの甕。外面は縦ハケ目調整。胎土に3mm大の砂粒を多めに含む。5は手捏ねの土器。内外面に指頭圧痕がそのまま残る。6の口径10.0cm、底径7.35cmの小皿。底部は回転へラ切り離し。板目圧痕7は土師器小皿。口径10.1cm。外底は回転へラ

切り離し、板目圧痕が残る。8は口径9.75cmの小皿。内底は回転ナデの後にナデを加える。口縁端部は丸く肥厚している。9は黒色土器、高台付椀、高台径8.0cm。10は須恵器の高台付坏。高台は屈曲部より内側に貼り付き、断面は台形状をしている。

石製品 11は黒曜石製の打製石鏃。基部は水平な無茎式。12は外湾刃の石包丁で薄手の作りとなっている。破片のため紐通しの小孔は見られない。13は図右端に両面穿孔の小孔がわずかに残っており、石包丁の再加工品か。用途不明。

第4節 第11面 (弥生時代後期~古墳時代前期) の調査

第10次調査では第I面の次層である黒色粘質土でややとまどうことが多かった。まず埋め土との 識別が難しく遺構検出に時間を要し、また古墳時代と弥生時代両遺構が同一レベルで現れ層位的な発 掘が通用しないかと思われた。困難だった遺構検出も日を追って順調に進むようになり、また遺構も

細かく観察を続けたことによって 層位的に遺構が重なっていること が分かってきた。このような経験 を活かそうと第12次調査に望ん だ。しかし第12次調査区では黒 色粘質土の堆積が薄く、かつ青灰 色粘質土の占める範囲も発掘区の 1/2以下しかなく、新たな観察力 が必要となった。発掘作業員の習 熟もあって第Ⅱ面の遺構として土 器溜、竪穴住居跡、凹地、土壙、 方形周溝を検出できた。



Fig.26 第Ⅱ面検出作業



Fig.27 第Ⅱ面検出作業

1. 遺構検出面の出土遺物

第 II 面の遺構を説明する前に第 II 面の遺構検出作業で出土した遺物をここでまとめる。これらはどの遺構にも属さず遺構から離れたことを意味するが、実測、図示した多くは北拡張区と呼んだR35グリッドの土器溜SJ01の上部で出土している。1の胴部破片はV字形に突帯が残存している。破片で器形不明。3の甕は、ハケ目整形後に口縁部~肩部への回転的横ナデや肩部の櫛描波状文の特徴から布留式系である。凹凸が微妙で直線的な口縁部形態にナデ肩形状と形態的特徴は比恵・那珂遺跡的である。4の二重口縁壺は、内面などに接合痕が明確に残り、内外面調整が規則的なハケ目仕上げなどの特徴から伝統的V様式系である。6は系統は分からない低脚器台(鉢?)の脚部だろうか。2号凹地にその合体形らしき土器がある。

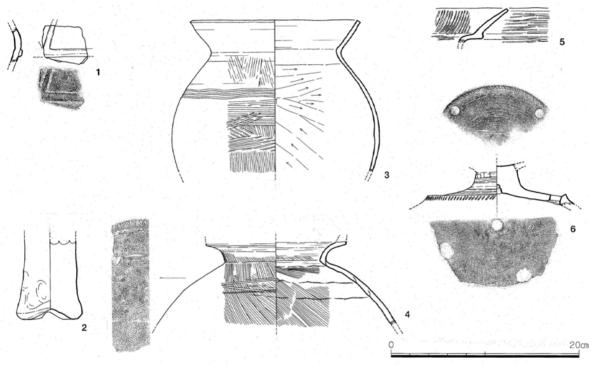


Fig.28 第Ⅱ面遺構検出面の遺物(縮尺1/4)



Fig.29 第Ⅱ面遺構検出面の遺物

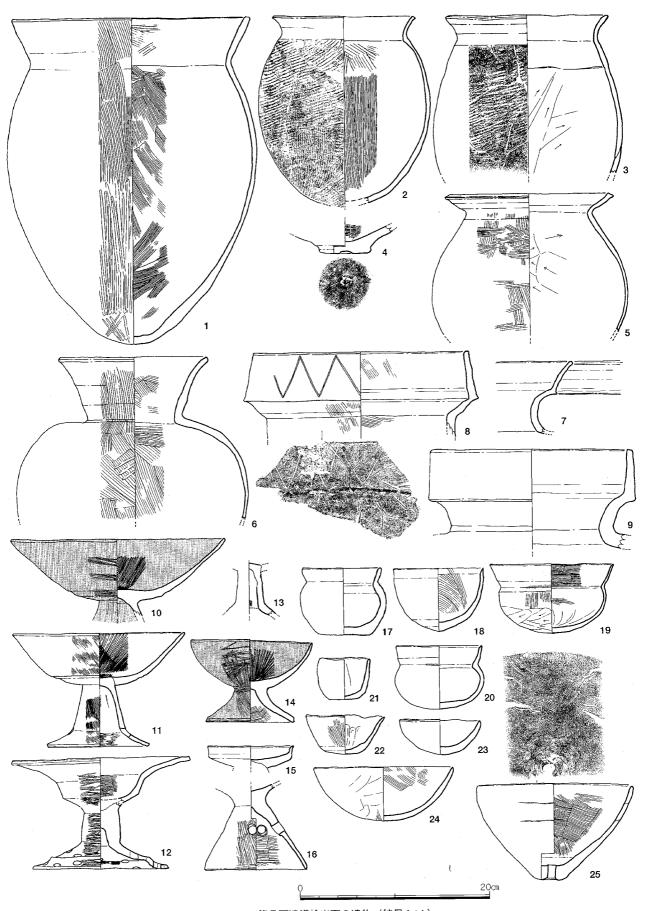


Fig.30 第Ⅱ面遺構検出面の遺物(縮尺1/4)

1の甕は、頸部の締まりが弱くなだらかで、長胴。内外面はストロークの長い不規則なハケ目とい う在地系(A系)の典型的な特徴をもつ。胴部外面下半は、稲藁の茎を束ねたような道具で雑な縦ハ ケ目を施し、底部内面には部分的に指頭圧痕がある。A系甕の主要属性の一つである胴部形態は、1 のように肩部に重心があるものから中位重心、さらに下ぶくれ胴と変化していく傾向がある。2、3 は伝統的V様式系(B系)甕で、2は外面調整に右上がりの太筋タタキが施されており、3ではさら に内面調整にケズリも部分的ながら採用している。4も、突出した上げ底の平底で、底部内面にすだ れ状ハケ目調整が施され、B系の甕あるいは壺の底部である。よって上げ底部分は輪台充填技法によ る成形だろう。5の甕は、外面調整はタタキ痕が残らず雑ではあるがハケ目で仕上げており、内面調 整はヘラケズリ、口縁端部は面取りなどの特徴から布留式系(D系)である。やや内湾する口縁部形 態やナデ肩状の肩部形態から、雀居出土の他のD系甕同様に比恵・那珂、博多遺跡的である。特に肩 部のナデ肩傾向は顕著である。6の壺は、胴部外面は右上がりの太筋タタキの後にハケ目を施すとい うB系的なものだが、ハケ目は内外面とも不規則である。ただその器形からB系とした。**7**はその形 状から山陰系の二重口縁壺である。本場の山陰地域では二重口縁壺と同様に二重口縁甕が多数見られ るのに、北部九州地域ではこの山陰系二重口縁壺が多く見られる。また山陰系土器は II A期末から北 部九州地域で出現し始める。7については検出面出土のために時期は分からないが、この二重口縁壺 がⅡB、ⅡC期に急増する傾向にあり、それは西新町遺跡で顕著である(庄内・布留式併行期の山陰 で見られる器種が全て一定量存在するのは西新町遺跡のみ。ただし山陰系壺が多くを占めるように器 種が選択的である)。このことはⅡA期末に出現する西新町遺跡型ともいえるD系甕≒とも関連があ るのだろうか。この山陰系器種はⅢA期になって激減する。8、9の二重口縁壺は両方とも粗い作り で、器壁が厚い。製作技法は分からない(A系か)。10の高坏坏部は、B系高坏に比べ精製で、坏部 上半がB系高坏に比べ直線的に伸び、器壁が薄く、坏底部はほぼ水平で口径に対して短く、坏部上半 と下半の屈曲部の稜は目立たず、坏部調整も内外ともに細密なミガキが施され、脚柱部は中空である などの諸特徴から明らかに庄内式系 (C系)といえる。丹塗りか。11の高坏は、胎土が精良で、坏 部は全体的に丸みを持ち、坏部の上下半の屈曲部の稜に浅い沈線状のくぼみが廻り、脚柱部は太くて 比較的短く中膨らみで、坏部と脚部の接合は脚頂部凸面付加法である、などの特徴からD系である。 ただD系高坏は内外面とも細密な横ミガキ仕上げであることが多いが、**11**はナデ、横ナデ仕上げで ある。12は珍しい形をした有段高坏で、外面の細密ミガキや多くの穿孔から特別な性格が感じられ る土器だが、技術系統的には器壁が厚く、屈曲がはっきりしており、坏部も大きく外反し、坏部と脚 部の接合が脚頂部凹面付加法であることからB系ではないか。13の高坏脚部は、小型で、坏部や脚 裾部は欠けているが、残存する坏底面や接合面から坏部と脚部の接合は脚頂部凸面付加法である。 14の低脚高坏は、脚部内面以外は丹塗りか。坏部の内外面には暗文風のミガキが施されている。15 は小型器台の受部である。脚部との接合面が明瞭に残り、そこから脚頂部凸面付加法だと分かる。こ の受部形態は久住氏のⅡ類にあたり、だいたいⅡ期に見られる。16も小型器台で、調整は外面が縦 方向ミガキ、内面はハケ目である。水漉胎土からなる精製器種である一般的な小型器台は多くは細密 な水平方向のミガキ仕上げであるので、形態的にも技法的にも違うこの小型器台は模倣品であろうか。 18の小型鉢は、口縁端部は先細り状態で、内面調整は規則的なすだれ状螺旋ハケ目であるなどB系 器種の特徴が見られる。底部が尖底ぎみの丸底であるのもそのためか。19、20は小型丸底壺で、19 は久住 Ⅱ b類、重藤壺 4 式で西新町 4 式前半 (Ⅲ B~ Ⅱ C期相当)、20 は久住 Ⅰ c類、重藤壺 3 式で 西新町3式後半(ⅡA~ⅡB期相当)となる。25の有孔鉢は、粘土紐の接合痕が残り、内面調整に はすだれ状螺旋ハケ目が見られるなどB系器種といえる。穿孔方向は外から内へ。

註1 久住1999の言うD系甕の形態的特徴については10次SE01で紹介している。

2. 土器溜(SJ)

第1号土器溜SJO1 第7、9次調査では、土器溜が集落の周辺縁に位置していることから、集落が営まれた微高地の面積、生活空間の範囲が推測できた。第10次調査でも南西から北東方向に延びる土器溜があり、第7、9次調査区と対峙するものと判断された。第12次調査区は、この土器溜の延長部の反対側であることから土器溜検出期待はしていなかった。ところが空港管理事務所の建設が発掘区の北側に急に決まり、拡張して調査を行った北拡張区で土器溜が現れた。R·S34·35グリッドにあり、4.5m×3.0mの範囲に土器が集中している。さらに発掘区外に延びていく可能性はあるが、南には延びていない。明らかに斜面という場所ではないが、西側に隣接して第1号凹地(SW01)があり、微高地から低湿地への移行部に当たっているとも言える。もちろん土器溜のすべてが微高地の周辺部に形成されるとは思えないが、SJ01を第7、9、10次調査区の土器溜と同じ意味を考えておきたい。

出土遺物 土器溜の範囲が狭いということもあって出土遺物の総量はパンコンテナ18箱分である。 このうち土器34点と石鏃1点の計35点を実測、図示した。石鏃を除くと他の時代の遺物混入はない。



Fig.31 SJ01検出作業

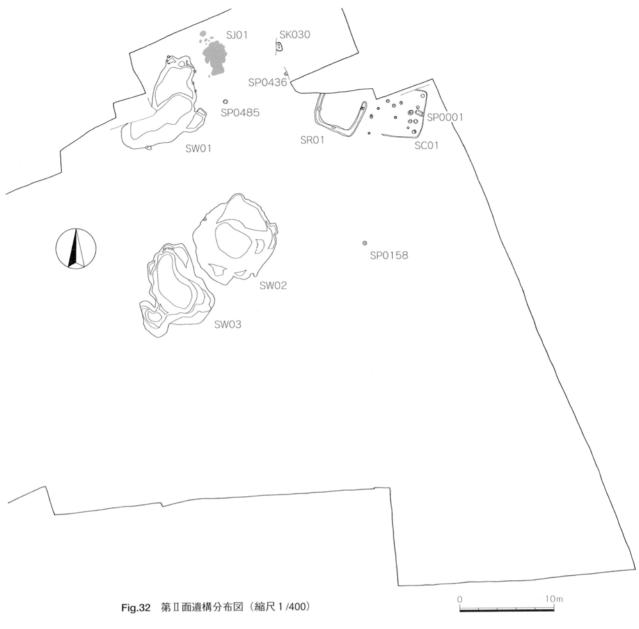
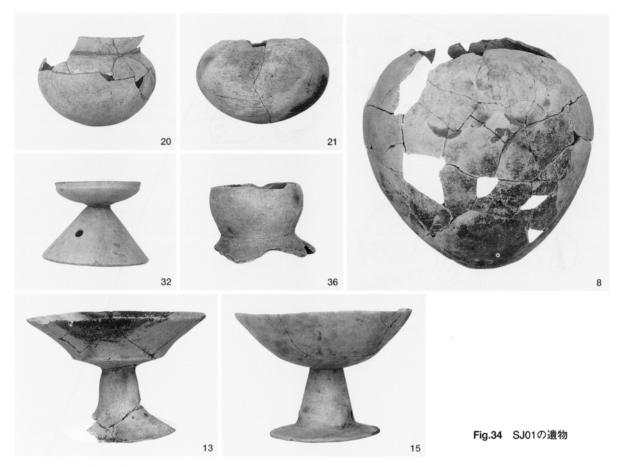




Fig.33 SJ01の実測作業



1の打製石鏃の他は全て古式土師器である。この北拡張区土器溜遺構は、第10次調査土器溜とは異なり二つの面に分かれていないが、そのことは土器に大きな時期差が見られないことからも言える。そのことを以下に述べる出土土器から見ていきたい。

2の甕は、外面がハケ目仕上げで内面がケズリ仕上げだが、底部が分厚く底面に平底の名残りがあ り、器壁も一般的な圧内式系(C系)、布留式系(D系)の甕に比べて厚く、口縁部も端部に丸みが あり外反気味であるなどの伝統的V様式系(B系)的な特徴から、C、D系の影響を受けたB系甕と いえる。3の甕は、外面が左上がりの細筋タタキ成形後に胴部下半に縦ハケ目を施し、内面が胴部下 半と上半の二段階ケズリ、頸部の屈曲も明瞭なことからC系である。ただ器壁がやや厚く、口縁部は 端部のつまみ上げが顕著でなく丸くおさめた感じである。4~11はD系甕である。ただその中にも器 壁や作り方に精粗の違いはあるが。例えば、外面はどれもハケ目仕上げで、胴部上半は10以外は縦 方向ハケ目の上に横方向ハケ目を施しており、さらに山陰系の特徴とされるヘラ描直線文、櫛描波状 文や吉備系土器によく見られる列点文を肩部に施すものもある。内面は胴部上半のケズリ方向の右左 はあるが同じ調整であり、口縁部~肩部にかけては回転的横ナデが施され(6、9、11は口縁部のみ)、 それによって頸部の屈曲がなだらかである、などこれらの甕はD系技法の特徴を揃えている。山陰系 の特徴とされるヘラ描直線文、櫛描波状文のうち、櫛状波状文の6、8や、10は肩部が張っており、雀 居遺跡出土D系甕の主流である「なで肩」状甕とは違う。このような倒卵形あるいは球形の胴部形態 は西新町遺跡で主流のタイプ^{±1}であり、8なども一応そのようなD系甕としたが、山陰壺 (甕) であ ってもおかしくはない。この西新町遺跡型ともいえるD系甕は、西新町、藤崎遺跡群と比恵・那珂遺 跡群などの他の異なった様相をみせる拠点集落とにおける山陰地域の関わり方の違いを示すものと言 える。口縁部の形状はだいたい直線的だが、口縁端面には外側に斜めに外傾するものと外側に引き出

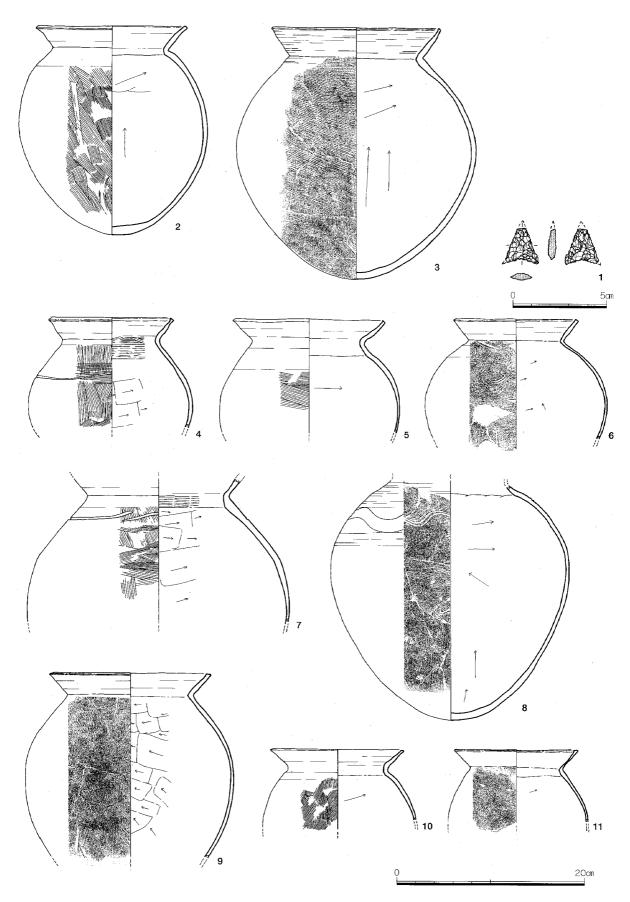


Fig.35 SJ01の遺物(縮尺1/4・1/2)

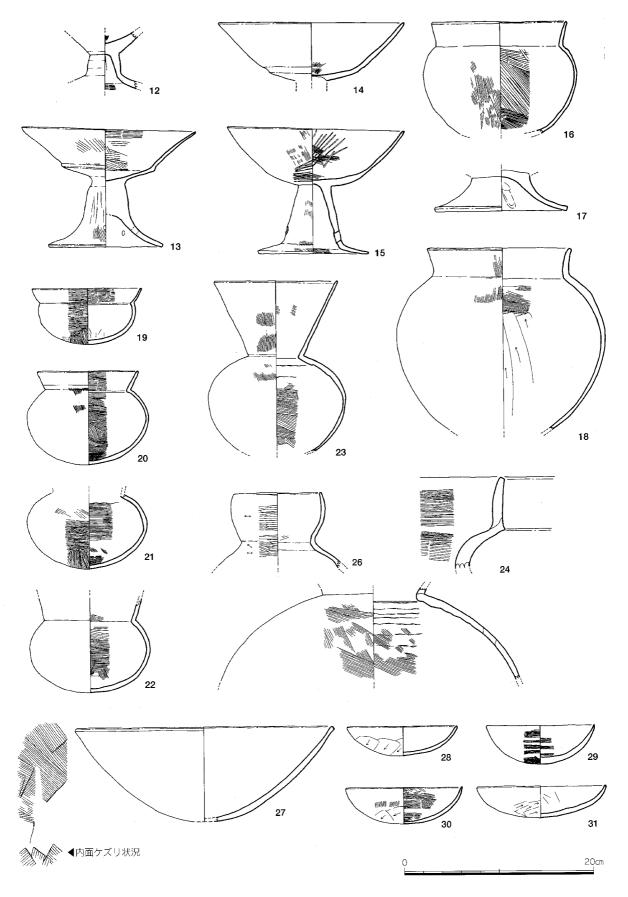


Fig.36 SJ01の遺物(縮尺1/4)

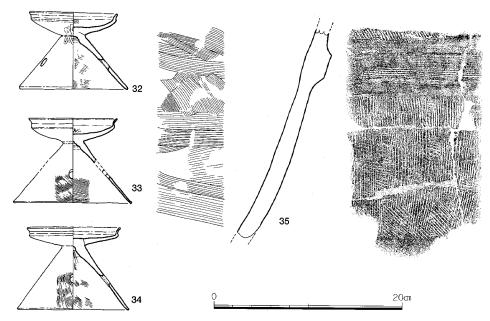


Fig.37 SJ01の遺物 (縮尺1/4)

したようにほぼ水平になるものがある。これらの甕はどれも全体の形が不明で、時期としてはⅡ期の 範疇となるだろう。12の高坏脚部は、脚柱部が短く、比較的太く、中ぶくらみの「エンタシス」状を 呈する所からD系高坏とも考えられたが、しかしC、D系高坏は坏底部がほぼ水平という特徴があり、 またこの12は器壁が厚く、調整もほとんどナデ仕上げであることから、D系に影響を受けたあるいは 模倣したB系高坏と考えた。13の高坏は、脚柱部が中実、坏部の上半と下半の境が明瞭で、坏部上半 は外反しその端部は先細り、であるなどの特徴からB系。14の高坏は、坏部が直線的で器壁が薄く、 坏と脚の接合は脚頂部凸面付加法でありC系となる。坏部下半に丸みを持ち、稜部に微妙な凹みが廻 るタイプである。15はC系に比べ坏部が丸みを持ち、坏底部が広くなり、脚裾部も屈曲がきつく低く なり、径が広がって脚柱部がハ字形に近付く、などの特徴からD系高坏である。ただ外面調整は細密 な横ミガキ仕上げが一般的なのに対して、ハケ目痕が残る粗いミガキである。19の小型丸底鉢は、久 住 II a 類、重藤鉢 1 式で西新町 3 式後半 (II A ~ II B 期相当) となり、外面には細密な横ミガキが施 される丁寧な作りであるが、対して20~22の小型丸底壺はハケ目仕上げや部分的なミガキという雑な 作りであり、時期比定の根拠となり得るかどうか。26はその形状から東海系の短頸ヒサゴ壺である。 この形式は東海地方では基本的には廻間2式期(だいたい I B~ II A 期相当)特有のものであり、こ の12次土器溜出土土器の時期幅(ⅡA~ⅡB期くらい)とも合う。しかし胎土や形態的にみて北部 九州産と思われる。東海地方のヒサゴ壺の外面調整は縦方向ミガキが基本であるが、26はハケ目後 に横方向ミガキ仕上げである。また口頸部も連弧文や横線文などの文様を施し、端部周辺は微妙に外 湾するものが一般的であるが、そのようなものも見られない。ヒサゴ壺は他には那珂川町松木遺跡 140街区1号住居(ⅡA期の前後)で出土している。これは全体的に丸みを持つ下ぶくれ胴で、口頸 部はよく締まり内湾している。胴部外面と内面下位はハケ目を施し、上位は工具ナデ調整である。小 型器台は受部も脚部も明瞭な外反形や裾広がり形へ変化していくが、32~34のうち33、34が新しい 要素を持っており、時期的にも他の共伴土器より新しい傾向(久住Ⅱ期後半)がある。

まず出土土器の製作技術系統を見ると、外来系色が強く、中でもC、D系器種が目立ち、珍しい東海系土器まで出土している。逆にA系器種はほとんど見られない。土器溜群の在り方や時期幅など第10、13次調査との比較や関連などは第13次調査土器溜で記述している。

3. 竪穴住居跡 (SC)

これまで古墳時代の竪穴住居跡は、第7、9次調査で13軒発掘しているのに対し、西に隣接する 第10次調査ではわずかに2軒にとどまっていた。第10次調査で検出した土器溜は第7、9次調査の

土器溜に劣らない遺物量であり、 井戸や土壙などの生活遺構も確か に存在することから、第12次調 査区こそ集落の中心地に当たり、 竪穴住居跡の検出が増加するもの と予想、期待をした。しかし検出 したのは1軒のみに終わり、集落 の中心はさらに北側に展開してい るようで、第13次調査に引き継 ぐことになった。

第1号竪穴住居跡SC01 Q28グ リッドにあり、黒色粘質土に掘り 込まれている。その北西コーナー



Fig.38 SC01検出作業

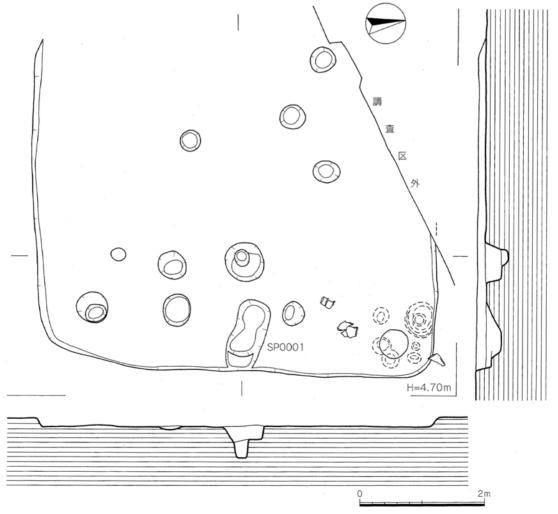


Fig.39 SC01実測図(縮尺1/60)



Fig.40 SC01全景 (北より)

が第10次調査区に入っているが、第10次調査では壁は確認できていない。また西壁はほとんど残っていないし、弥生時代の土壙やピットと重なっていることもあって保存状況は悪い。残っている東、南壁から規模を復元すると、東壁590cm、南壁490cmの隅丸長方形プランで床面積は約28.9㎡。全体図でわかるように第10次調査のSCO2とは5mも離れていない。床面には大小10数個のピットがあるが、主柱穴は不明。壁溝はなく、東壁に接するSPO001は屋内土壙と考えた。

出土遺物 埋め土は数cmしかなく、弥生時代の土壙を切っていることもあってむしろ弥生時代の遺物が多い。



Fig.41 SC01の遺物

土器・土製品 1~4は弥生時代中期の壺。1は口径32.0cmの広口壺。頸部は直線的に開き、鋤先状の口縁部が水平に付く。口縁端部は肥厚し、口唇状の断面となる。頸部内面は横ミガキ。2、3は甕の小さなL字形口縁。4は径11.6cmの底部は外縁を残しわずかに凹む。外面は縦のハケ目の後に縦のミガキ。内面はナデの後にまばらにミガキを加える。5は投弾。長さ3.85cmの楕円形で一方が尖り気味。7~13は古式土師器である。椀は型式的には変化が鈍いが、技術系統では8のように、すだれ状のらせんハケ目が特徴であるB系技法が確認できる。9は小型丸底器種が壺と鉢に分化し始める頃のものである。11は形状から小型丸底鉢の破片だろうが、破損や調整磨滅のため時期、分類比定はできない。12の底部は小さいながらも明瞭な平底で、外面はミガキで内面は工具ナデという調整方法からB系だろう。底部外面に大小の圧痕が残り、また内外面がクレーター状に弾け飛んでいる。13の高坏は、坏部上半と下半の明瞭な屈曲に上半部が大きく外反し、調整も若干ミガキが見られるがハケ目がはっきりと残っておりB系。

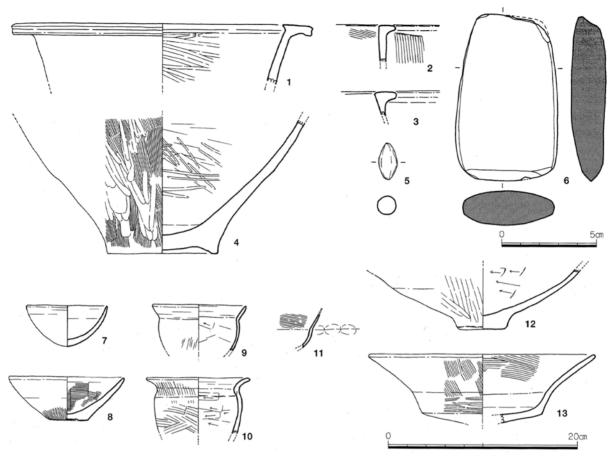


Fig.42 SC01の遺物(縮尺1/4・1/2)

14の椀は内外面ともハケ目調整である。特に内面は 規則的で底はすだれ状螺旋ハケ目である。15は丹塗磨 研高坏で全面付着しているが、外面の一部に焼きムラが あり二次焼成によるものか。

石製品 6は頭部が折れており、現在長8.8cm、刃部幅 5.45cmの磨製石斧。身の断面は長方形に近く、厚さは 1.8cmしかない。

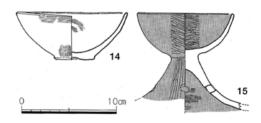


Fig.43 SP0001の遺物(縮尺1/4)

4. 土壙 (SK)、ピット (SP)

土壙の遺構名を与えた落ち込みは多いが、古墳時代から弥生時代後期の遺物を出土する土壙は少なく、ここではピットも合わせて取り上げる。

第30号土壙SK030 Q34グリッドで検出。一部が撹丸



Fig.44 SP0001の遺物の出土状況

部で不明だが隅丸方形のプランだったのだろう。深さは27cmあり、遺物は埋め土の上部から出土している。

1、2は古式土師器である。1の甕は、胴上半外面の横ハケや口縁〜頸部の回転的な横ナデ、なだらかな頸部の屈曲、内面ケズリなど布留式系技法である。肩部、口縁部の形状は他の雀居出土甕と同様。 2の小型丸底壺は、久住 I c 類、重藤壺 3 式で西新町 3 式後半(Ⅱ A~Ⅱ B 期相当)となる。1 も II B 期か。

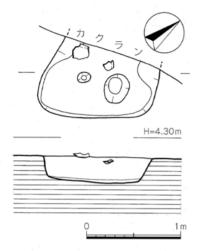


Fig.45 SK030実測図(縮尺1/40)

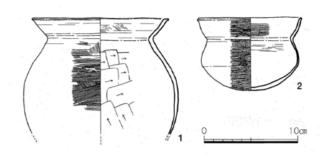


Fig.46 SK030の遺物(縮尺1/4)



Fig.48 作業風景

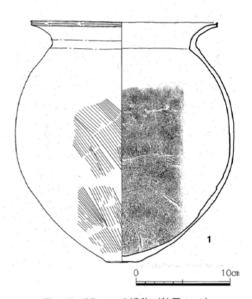


Fig.47 SP0158の遺物(縮尺1/4)

第158号ピットSP0158 1の古式土師 器甕は表面が磨滅しているものの、外面は粗いが規則的なハケ目調整仕上げ、内面は胴下半がすだれ状螺旋ハケ目で さらにケズリ、ナデを一部に施す、底部は丸みのある小平底、口縁部は外反し、端部はつまみ上げたような形状、一単位が狭い粘土紐接合の痕跡などの特徴が観察でき明らかにB系である。1 の外面タタキはハケ目によって残らないが、玄界灘沿岸ではこのように外面タタキがしだいに減少していく。しかし他地域では比較的多く残るようだ。

第485号ピットSP0485 S35グリッドに位置する。直径55cmの平面プラン。木製鋤が出土した。 雀居遺跡の新しい知見の一つとして、ごく普通の土壙、ピットから木製品が出土することで、その状 況から祭祀的な行為が推測されることである。本例は木製品自体にその痕跡が残っているわけではな く、また出土状況も特記することはないが、類例の一つに加えた。

1は身と柄を一木 作りにした鋤。各部 の寸法は図の通りで ある。柄は断面円形 ではなく長方形に近 い。身部の肩は柄に 対し直角ではなくや や下がっており、両 肩で角度が異なる。 身部の形状はU字形 で刃部付近には両面 とも大きめの削り痕 が残っている。柄か ら身部にかけて削り を加え平坦面を作っ ている図下の方を表 とした。

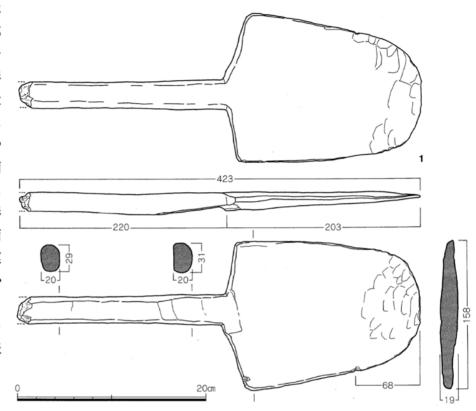


Fig.49 SP0485の遺物(縮尺1/4)

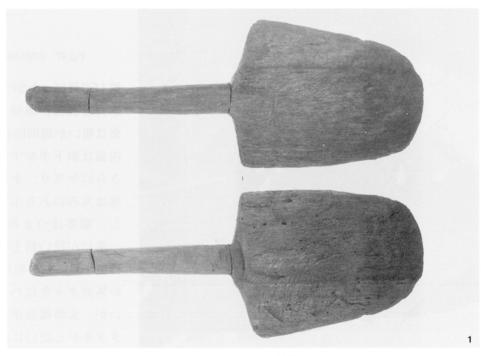


Fig.50 SP0485の遺物

第436号ピットSP0436 R34グリッドに位置する。直径50cmの円形平面プランで深さは29cm。遺物は木製品だけで、数片を縦に束ねたような状況で出土し、取り上げ後接合して木製品であることに気が付いた。

2はナスビ形の曲柄又鍬。柄と組み合わせる頭部は断面台形状に削り面取りしている。へタ状の突起部は片側がやや欠けているが左右対称の加工である。側面にも削り痕が顕著。身部は先端に向かって薄くなり厚さは6mm。果たして機能したのかと疑問に思う。耕起だけでなく、別の作業も検討する必要があろう。

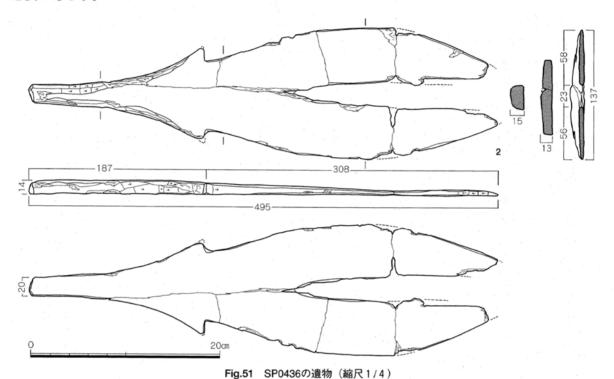


Fig.52 SP0436の遺物

5. 凹地 (SW)

Vグリッドラインから西側は土壌やピットなどの遺構が希薄になり、入れ替わって不整形の大きな凹地が分布している。これらは洪水や湧水などの自然作用でできたと思われ、今も激しく湧水する凹地もある。多種多様な遺物が出土したが、各時代の遺物が混在していないことから長期間を通じて開口していたのではなく、短期間で埋まり、また別の凹地が新たに出現することを繰り返したようである。縄文時代の貝塚のように食糧の廃棄物はないので食糧や食生活を復元することはできないが、雀居遺跡の生活や農作業を復元する上で重要な遺構と言うことができよう。

検出した凹地は7基あり、SW01~03が古墳時代、SW04~07が弥生時代である。なお4基の弥 生時代凹地は、第Ⅲ面遺構として後述している。

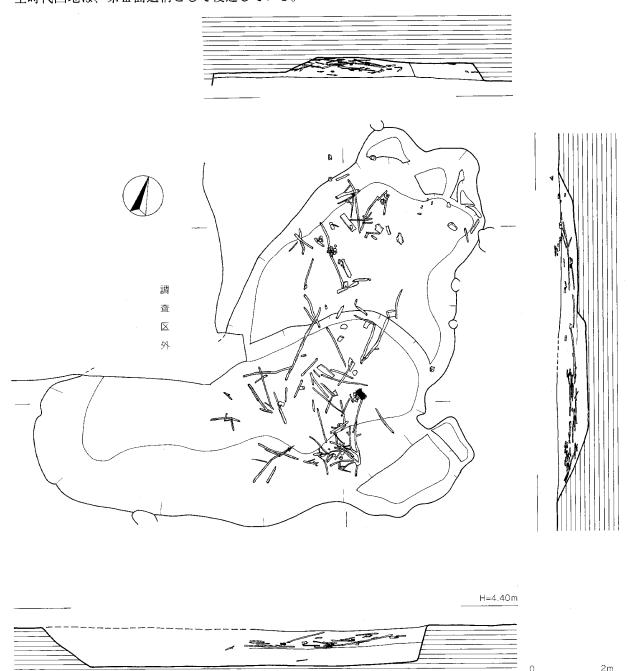


Fig.53 SW01実測図(縮尺1/100)

第1号凹地SWO1 T39グリッドに位置する。二つの楕円形の落ち込みがL字状に繋がった平面プランとなっている。底面は南東側が一段深くなっている。埋め土は砂質黒色土で細い棒状の木材が中程に折り重なっおり、特に周囲から投げ込んだ様子はなく自然に堆積したような状況である。この木材の間から土器や木製品が出土し、実測、図示した木製品は北西側の落ち込みに集中していた。



Fig.54 SW01 (南より)



Fig.55 SW01 (東より)

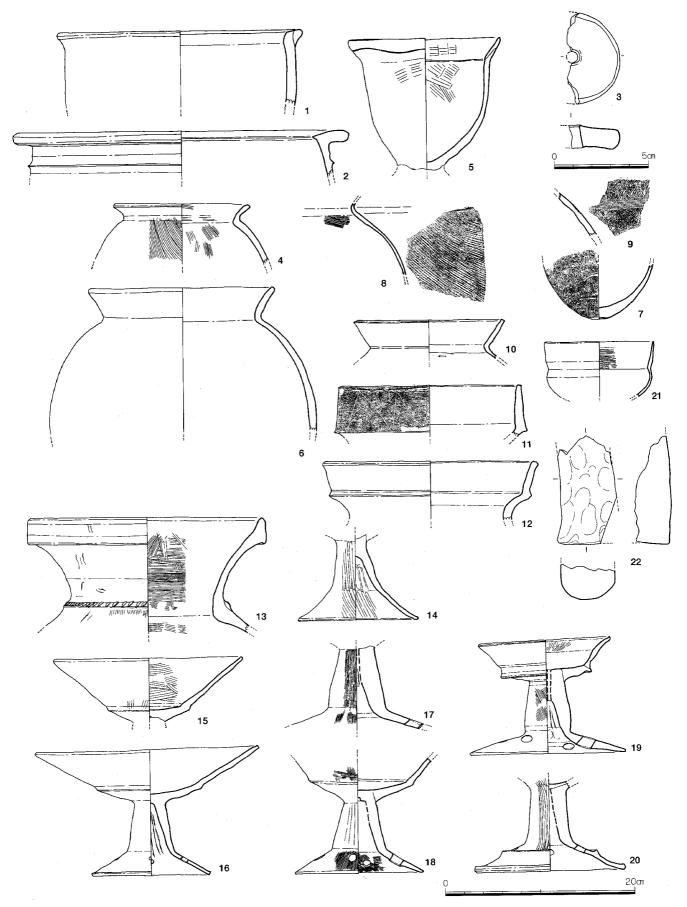


Fig.56 SW01の遺物(縮尺1/4・1/2)

出土遺物 土 器 1、2は弥生時代の甕。この1号凹地は圧内式、布留式併行期なので弥生時代遺構からの混入品であろう。4~21は古式土師器である。4の甕は内外面ともハケ目仕上げでタタキ痕は見られないが、口縁部が短く外反し端部を丸くおさめ、頸部が締まっているなど、この残存部位だけでは在地系(A系)とも伝統的V様式系(B系)とも言

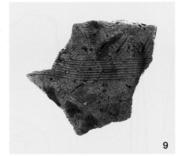




Fig.57 SW01の遺物

えないものである。5は台付甕で、台の接合痕跡が残っている。作りは粗雑で台の接合部分には指で 撫でつけたり押さえたりした痕が残っており、小型品だが祭祀土器とも思えない。6の甕は、外面が ナデ仕上げで接合痕が残る、内面は浅いハケ目とナデ、口縁部は微妙に外反し端部を丸くおさめるな どからB系である。7はその大きさから小平底の坩か。外面は底部付近に右上がり方向のタタキが見 られ、内面はハケ目調整だろうが最後にナデ消している。 B系といえる。8の甕肩部の破片は、外面 が左上がりの細筋タタキ成形、内面が右上方向のケズリ調整で頸部内面にハケ目が残るなど庄内式系 (C系) だが、口縁部の横ナデが頸部まで及んでいるので屈曲はなだらかである。布留式系 (D系) の影響と考えられ、C系甕の中でも新しいものだろう。9は小片で全体の形状も製作技法も分からな いが、外面には櫛描波状文の上に櫛描直線文が施されており、D系や山陰系の甕肩部片ではないか。 10の甕口縁部は、直線的な形状に回転的な横ナデが肩部まで施されており、頸部の屈曲もなだらかで あり、まずD系であろう。12は若干器壁が厚いもののごく一般的な、おそらく玄界灘沿岸地域産の山 陰系二重口縁壺である。山陰系土器はⅡA期末から西新町遺跡などを中心に見られ始めるもので、12 もそれ以降のものであろう。13の二重口縁壺は、内外面ハケ目調整、頸部に刻目突帯、なだらかな各 屈曲部などの特徴からA系である。一般的なA系二重口縁壺は二次口縁部がもっと長くそして外傾、 直立、内傾しているが、この形式はSR01のA系二重口縁壺と同じ短い形式であり、その中でもさら に短いあるいは厚みがあるといえる。14~20の高坏のうち、14は中空の脚柱部に坏部との接合が脚頂 部凹面付加法であることからB系。15は坏部の器壁が薄く直線的で、坏底部がほぼ水平で短い、明瞭 に残る脚部との接合面から脚頂部凸面付加法だと分かる、などの特徴からはC系となるが、調整が内 外面ともハケ目仕上げで、胎土が石英、長石を多く含むなど精製品といえるものではなく、C系の影 響、模倣品といえる。この接合面に径2~3mmの浅い軸芯痕が見られ、接合されていた脚部の方から 丁度17の脚部のようになっていたのであろう。軸芯痕については山陰地域や吉備南部で多数見られる ことが知られており、この玄界灘沿岸地域でもD系高坏やC、D系器台などの精製器種を中心に確認 できるが、それらの地域との関係の一面を示しているといえる。軸芯痕は他に18、19でも確認できる が、これら14~20の高坏はどれもB系(19は山陰系の可能性あり)で精製品ではない。またこれらの 高坏の坏と脚の接合、製作技法も多様である(出雲地域の高坏については松山智弘1991「出雲にお ける古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌8』などの研究がある)。19の軸芯痕は貫通して いるし、20は中空に作った脚柱部に円盤状粘土を充填している。21の小型丸底壺は、胎土が小片の雲 母や長石を含むやや粗い感じのもので、この雀居集落で作られた在地品なのであろう。比恵・那珂、 博多、西新町以外の周辺集落ではこれらの各集落の在地品が多い。これは久住 I c 類、重藤壺 4 式に あたり、時期は西新町4式前半(ⅡB~ⅡC期相当)となる。共伴土器から1号凹地の時期をみると、 ⅡA期以降のC系甕やⅡB期以降の山陰系二重口縁壺などが在り、そこからこの小型丸底壺の時期は 妥当といえよう。

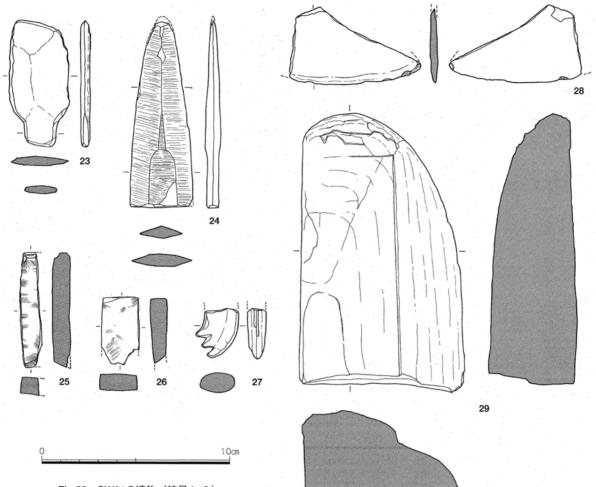


Fig.58 SW01の遺物(縮尺1/2)

石製品 23は先端が折れた磨製石鏃の 形状をしているが、まだ身や茎が未整 形、未研磨であることから未製品であ ろう。現在長6.7cm、幅3.1cm。24は 磨製石剣の切っ先(鋒)部。現在長 9.9cm、幅3.4cm。鎬は鋒より7cmま で通る。研磨は十分でなく一部に自然 面を残している。25は縦に割れて刃部 幅が分からないが、鑿状の方柱状片刃 石斧であろう。全面よく研磨されてい る。刃部の角度が大きい。26は扁平片 刃石斧で、刃部を欠いている。27の石 材は滑石。端部が三つ又に加工してお り、勾玉状の垂飾品か。28は石包丁か。 剥離し片面のみに刃部がある。29は図 左側面が平滑に研磨されている。砥石 としては不安定な形状で、用途不明。

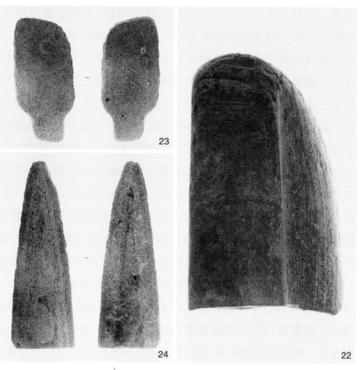


Fig.59 SW01の遺物

木製品 SW01で何らかの加工痕が認められるものについては、できる限り実測し、図示するように 努めた。30は鍬の柄の端部で、広葉樹の芯無し材を用い、削り痕を残さない程丁寧な加工を施している。31は二又鍬で縦に割れている。柄孔は長方形で柄との角度は46度前後。復元すると頭部から肩部にかけてゆるやかに湾曲し、又先端部に向かって内側にすぼまっている。身の一部に削り痕が残る。32は曲柄平鍬。頭部を欠いているが全形を知り得る。左右側面の削り痕は顕著である。笠部は左右で厚さが異なり片方が8mmに対してもう一方は4mm。身は刃先に向かって幅を広げ、先端は山形に尖ら

30 Fig.60 SW01の遺物 46° 509 299 31

Fig.61 SW01の遺物(縮尺1/4)

している。33はナスビ形の鍬。埋没中に 数片に折れ、しかも欠損部があるが、接 合して元の形状に復元できた。41頁の ナスビ形木製品と比べると、又部の開き が大きく下膨れの形状となっている。へ タ(笠)部は両方とも欠けているが、欠 損後にも潰れており、あるいは紐擦れか。 34は鍬の泥よけ具(停泥)と推測した。 半楕円形に図化しているが全周が欠損の 可能性がある。中央に縦長楕円形の孔が 開く。

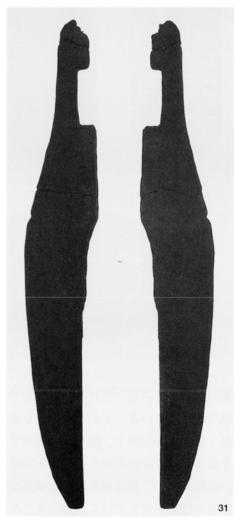


Fig.62 SW01の遺物

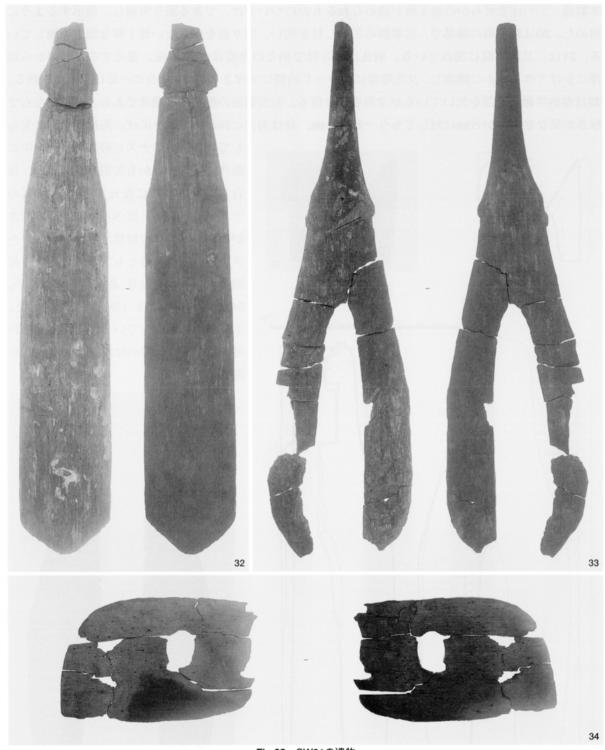


Fig.63 SW01の遺物

35は竪杵の完形品。竪杵は割れを防ぐために芯無し材を使うことが多いが、本例は芯持ち材で一部に 樹皮が残っていることから丸太材をそのまま加工していることが分かる。長さから手杵か。搗き部と 握り部の境が明瞭で、削り痕が明瞭である。握り部中央に細い溝が掘り込まれているが目的不明。搗 き部は両端で断面が異なる。図上端は平らに切断し、図下端は丸く加工している。上端は摩滅が少な いのに対し、下端は使用による摩滅が進んでいる。ただし使い込んだ印象はない。36は径約3cmの広 葉樹の枝を使用している。30のような加工を施しているが、削りが粗く作りも異なることから用途不 明。

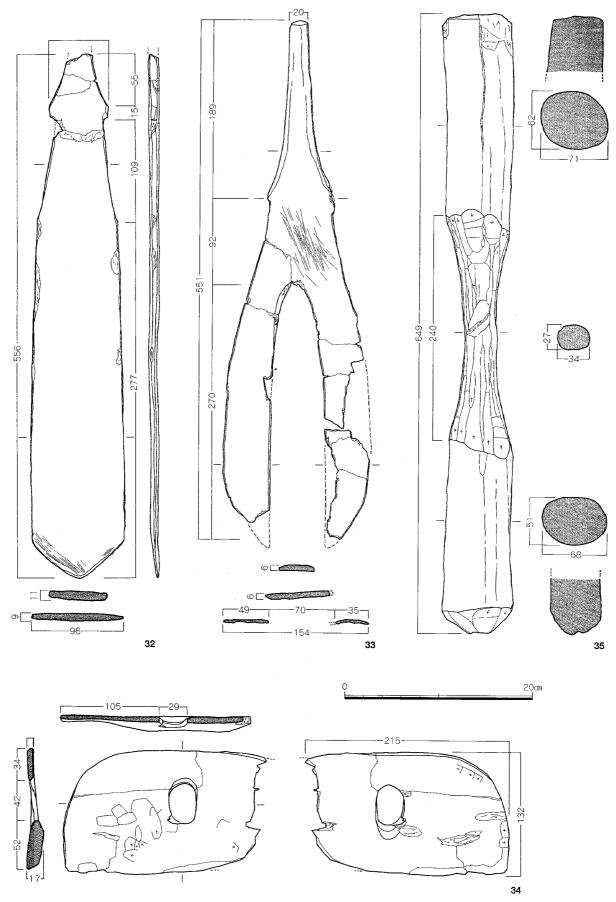


Fig.64 SA01の遺物(縮尺1/4)



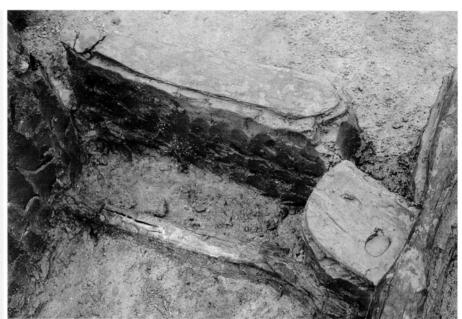


Fig.66 木製品の出土状況



Fig.65 SW01の遺物

Fig.67 木製品の出土状況

37は針葉樹の板材で、端部、側面ともきれいに削られている。両面も平滑。用途不明。38は針葉樹の 柾目材を加工している。板材の一方に中心軸よりずれて長方形の孔を開けている。この孔の切り込み は長辺は垂直で、短辺はやや斜めに削られている。全体に仕上げは粗い。39は針葉樹の柾目材。機織 りの打ち込み具のように両端に握り部様の作りがあり、身の断面も三角形に一方が鋭角になっている。しかし全体に腐食し、用途不明。40は針葉樹の柾目材。木目だけでなく加工も美しい。両端に小孔1個。中央に長軸に対して直交し浅い溝を彫り込み、この溝の上下2か所に孔を開け、樺皮が残っている。他の板材を繋ぎ組み合わせたのだろう。両面に刃物傷が無数に残り、樺皮の上にも付いている。 刃物傷は上図の中央部にはなく、部材を組み合わせたままで刃物を当てたと推測される。中仕切のある方形箱を想定したが、底板との連結が不明だし、側板より仕切の連結を強くしているのはおかしい。

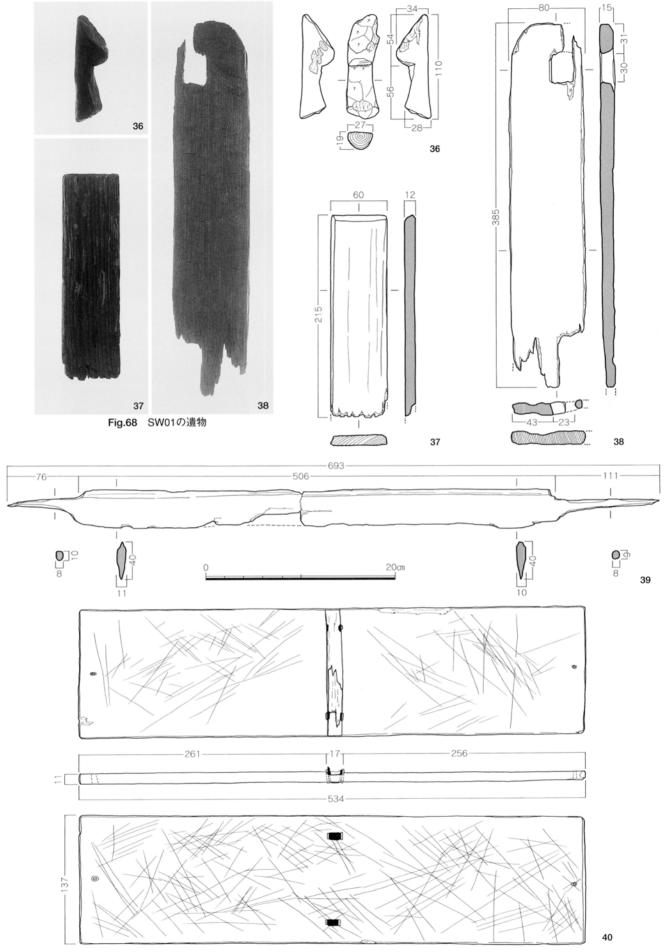


Fig.69 SW01の遺物(縮尺1/4)

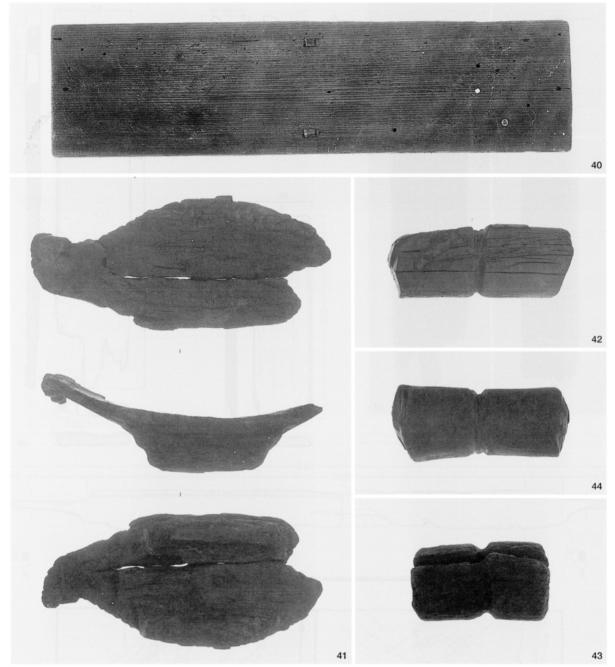


Fig.70 SW01の遺物

41は広葉樹を横木取りし、座板と2本の脚を刳りぬいた腰掛けである。年輪を断面図に示した。出土時は、脚が低く、座板が内窪みであり、その両端も折り返して装飾的であることから枕と考えた。座板は一端が欠けているが、上から見ると両端が狭まる楕円形で、丁寧な加工を施している。2本の脚は長軸に対して並行するように刳りぬかれている。逆台形でハ字形に外に開き安定を図っている。脚がある裏面の削りはやや雑。やはり高さが気になる。胡座をして座ったのか、それに内窪みに尻が合うのかどうか。42~44は木錘。42は広葉樹の丸太材を切断しており、一部に樹皮を残している。中央の溝は細めで、両端の削りは鋭利。火熱を受けている。43も同じように丸太材を切断している。中央の溝はやや摩耗しているようである。変形し割れている。44は広葉樹の丸太材を樹皮を付けたまま切断し、中央に溝を削り込んでいる。両端の削りは鋭利である。

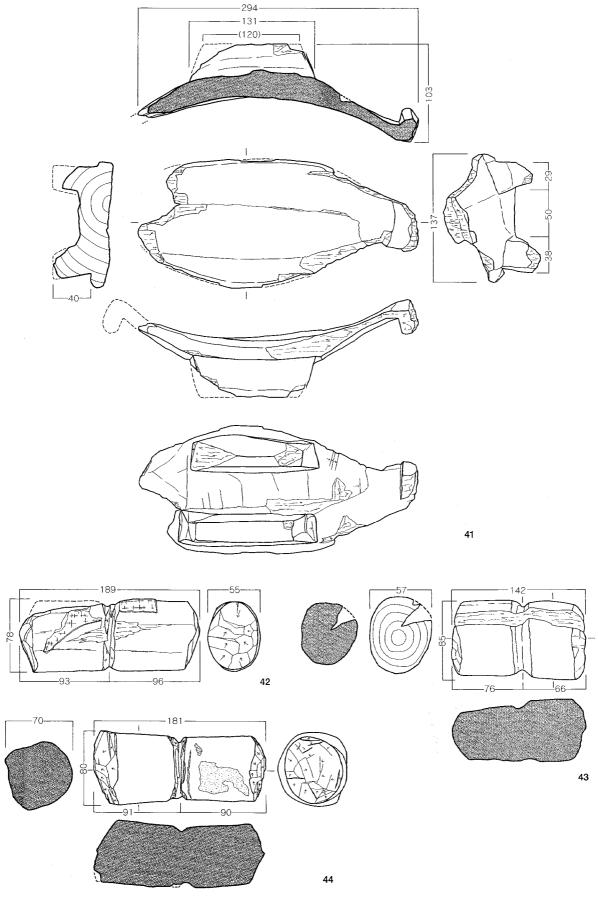


Fig.71 SW01の遺物(縮尺1/4)

第2号凹地SW02 凹地を遺構として認識したのはSW02が最初である。2区の西端に当たるU31・32グリッドで第 I 面水田耕作土の下に木片が折り重なって現れ始め、土層も砂質土に変化することか

らこれより西側は低湿地になり遺構は存在しないと速断してしまった。木片は湿地の岸にうち寄せられ堆積したと思い込んだのである。この木片を追うと直径11.50m×9.94mの凹地であることが分かった。凹地の中では最も湧水が激しく、木片はまさに岸に打ち寄せられた状況で北側から東南側に集中している。SW02の東側に竪穴住居跡や土壙などの生活遺構が展開していることと関係しているのだろう。



Fig.72 作業風景

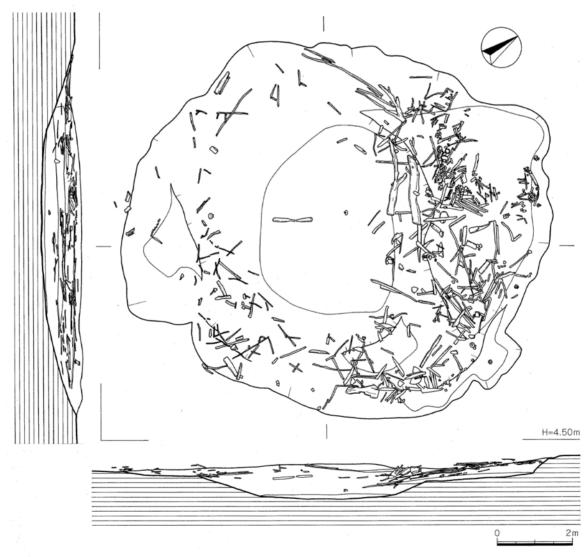


Fig.73 SW02実測図(縮尺1/100)

出土遺物 堆積している木材はほとんどが自然木で、この間から木製品が出土した。土器は弥生時代前期後半から中期、古墳時代前期の時期で、弥生時代中期中頃から後期が抜けている。発掘区全体にこの期間の遺構は希薄であり、SW02の出土遺物はこれを反映している。しかし土器が示す弥生時代前期後半から古墳時代前期までの長期間凹地であったとは思えない。数量からすると圧倒的に古墳時代土師器が多く、また木製品の時期とも一致している。したがって弥生時代遺物は後の混入とした。土 器 1~15は弥生土器。1は突帯文土器の甕口縁部。突帯は口縁端からわずかに下がって貼り付けている。外面は横条痕、煤付着。2は口径6.7cm、器高7.8cmの小形の甕。口縁部は小さく外湾する。外面縦半分に黒斑。3は小形の甕。口縁部を欠いているが器高は9cm前後か。やや体部に張りがあり丸みのある体部となっている。4は底部が異様に張り出し、台付き甕のような器形となっている。口径15.2cm、底径6.3cm、器高15.6cm。器壁が全体的に厚く、口縁部は小さく屈曲する。5は口径18.9cm、口縁に接するように縦ハケ目調整。その後に幅広の沈線を1条巡らせている。6はは口径22.9cm、く字形に屈曲する口縁部は肥厚し、端部は丸みを持たせている。外面のハケ目は細かく、沈線は水平ではなく波打っている。7は口径が32.8cmと大きく、体部も大きく開いていることから鉢に近い。ただし外面に煤が付着し煮沸に使っている。8は同じように33.7cmと大きな口径である。口縁部の湾曲

は小さい。外面に煤。9は口径 24.0cm、口縁部の作りに特徴 がある。やや張りのある体部は 上端で外湾して断面三角形の口 縁部を乗せている。口縁外端に は等間隔の刻み目。10の底部は やや上げ底で底径7.0cm。外面 の調整は上半が細かな縦のハケ 目で下半は縦のミガキ。内面の 炭化物は内底にはなく、約2cm 上方から帯状に付いている。11 の口縁部は、内側への突出が大 きくT字形に近い。しかも上面 が凹んでいる。12は甕の口縁下 突帯部の破片。断面三角形突帯 と同じように粘土を貼り付けて 逆向きの鈎文を表現している。 13は蓋。摘み部の凹みは浅い。 14、15は甕の底部。14は底径 7.95cmで分厚い器壁となって いる。内面に炭化物付着。15は 7.6cmの底径。底部に黒斑。

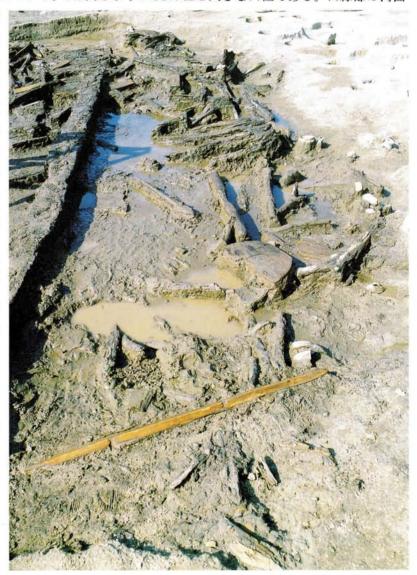


Fig.74 木製品の出土状況

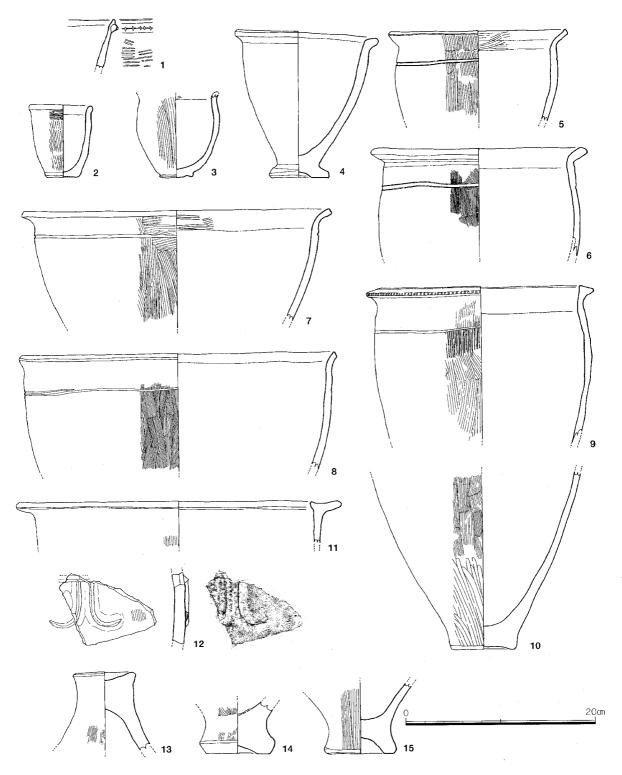


Fig.75 SW02の遺物(縮尺 1 / 4)

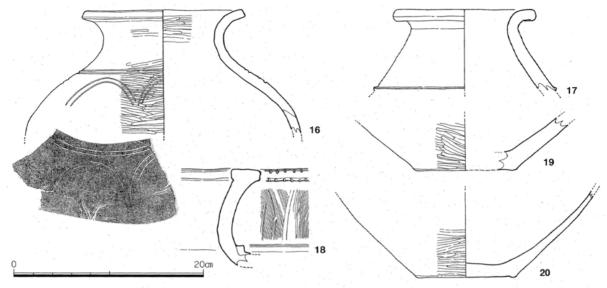


Fig.76 SW02の遺物(縮尺1/4)



Fig.77 SW02の遺物

21、22の甕は内外面ともハケ目仕上げでおそらく長胴甕だろうから在地系(A系)といえる。A系では頸部や胴部下半などに突帯が巡るものが見られるが、22の甕(推定復元口径53.4cm)のように口縁端部にさらに二次口縁がつく形態は珍しい。22の外面は突帯貼付前もハケ目整形し、突帯もハケでナデ付けている。24の伝統的V様式系(B系)甕の底部破片は、右上がりの太筋タタキ仕上げの不安定な平底で、内面も工具ナデが螺旋状に施されている。34~39の甕は布留式系(D系)甕である。どれも胴部上半が残存するのみで全体の形は分からないが、比較的形態が掴める

ものは球形胴であろう。外面は縦方向ハケ目の後に横方向ハケ目を施し、内面は中位が左上方向、上 位が右~右上方向のケズリ、口縁部~頸部~肩部の回転的横ナデ、のD系の特徴が見られる。口縁部 は、34は内湾し、他は長さの長短や器面の凹凸はあるがどれも直線的である。34、36、39は口縁外側 に対し内側を強く横ナデした感じで、器面は凹凸があり、34などは端部が内側に肥厚している。一方 の35、37、38は口縁端部を外側水平につまみ出した形で、35は端部内側も小さな段をもって肥厚して いる。肩部形態はこの雀居遺跡では比恵・那珂、博多遺跡同様に多くが「なで肩」状を呈するが、37 や39は明らかに肩が張った球形胴である。また山陰系の文様とされる櫛描波状文や吉備系の文様とさ れる列点文が廻るものもある(次山淳1995「波状文と列点文」『文化財論叢Ⅱ-奈文研創立40周年記 念論文集-』など)。41の小型丸底壺は水漉し胎土である。調整法は外面がハケ目の後に部分的な細筋 横ミガキで、内面が規則的なハケ目仕上げで底部はすだれ状螺旋ハケ目となっている。このようにB 系の規則的なハケ目調整を基本に、庄内式系(C系)小型丸底壺の細密な横ミガキ整形法に影響、模 倣したものと考えられる。B系器種は変異形が多いものであり、時期比定の根拠には難しい。42、43 の長頚壺を見比べると、42はハケ目、ナデによる整形で形状もやや崩れている。対して43は長く直線 的な口頸部は接合によるもので、細かいハケ目調整の後に外面は細密な横ミガキ、内面は暗文ミガキ が施される典型的なC系の精製器種である。47の山陰系二重口縁甕はその中でも一般的な器形である。 この玄界灘沿岸地域では甕類は壺類に比べて少ないが、製作技法や器形は頸部の長さを除いた他は同

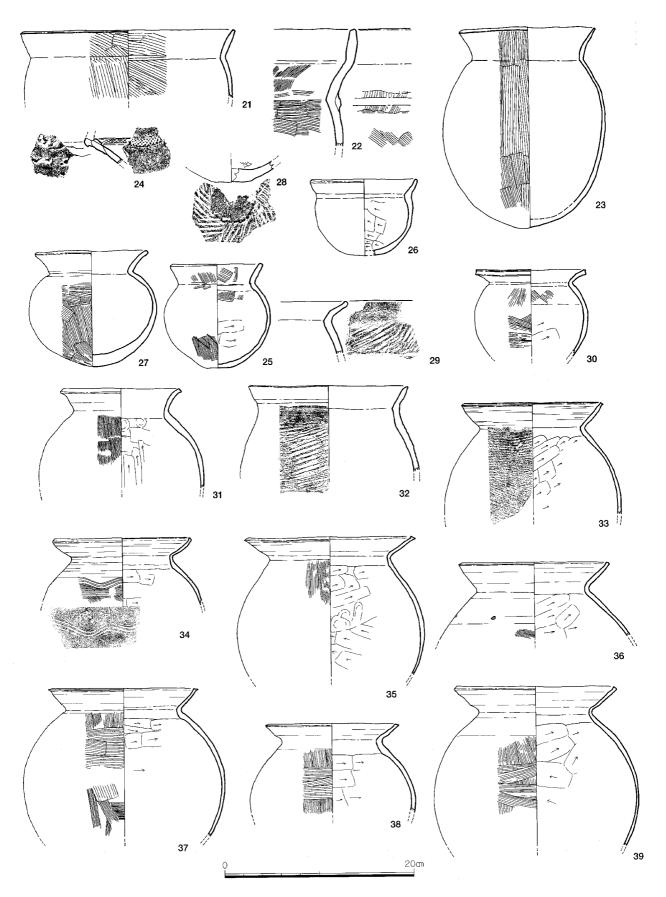


Fig.78 SW02の遺物(縮尺1/4)

じで、当地域で出現し始める時期もどの器種も同じⅡA期末以降である。49、50はそれぞれ小型丸底 鉢、壺でやや精良な胎土からなる。作りも外面に細密な横ミガキを施し、50には暗文ミガキを施すほ どの精製品である。49は久住Ⅱb類、重藤鉢1式にあたり西新町3式後半(ⅡΑ~ⅡB期相当)、50 は久住 I f 類、重藤壺 5 式にあたり西新町 4 式後半 (Ⅱ C ~ Ⅲ A 期相当)となる。このSW02がある 程度時期差が見られることを示すものである。ところで50には裾の欠けた低脚が付いているが、これ から推定復元できる形状は、次の51のような脚柱部が中実のB系器台や先に第Ⅱ面遺構検出面の所で 紹介した低脚器台(鉢?)のような器種などの脚部が考えられる。小型の精製品では、組み合わされ る場合が多い器種どうしが合体した器形がたまに見受けられるが、これもそうである。このような器 形からは当時考えられていた器種のセット関係の一端が分かる訳で、50の場合も、B系器台あるいは 低脚器台(鉢!?)と小型丸底壺のセット関係がみえてくる。しかもこのような特殊な器形の精製品か らはさらに祭祀的な要素も想定できる。51のようなB系小型器台は、胎土は精良ではなく、調整も外 面はナデと板ナデの仕上げであるようにそれぞれ変異が大きく、時期比定に使えない。逆に52、53は どちらも残存部は受部のみだが、胎土がやや精良でナデあるいは細密横ミガキ仕上げのC系の精製品 である。そのうち52は古い時期のもの(受部0類)で $IB \sim IIA$ 期くらい、53は新しい時期のもの(受 部Ⅳ類)で大体ⅡB期以降になる。61はその器形から東海系の器台、脚裾部径が口径を凌駕する小型 のタイプと思われる。当地域では東海系土器のうち、S字甕やパレス壺、有稜高坏やヒサゴ壺は少数 ながら確認されているが、この小型器台については現時点では出土例を知らない。外面にはミガキ状 ナデが施されているが、胎土は精良ではなくて一般の土器と同じである。62の高坏は、調整は摩滅し ているが、脚柱部が中実で、坏部は屈曲部の稜がはっきりしており、胎土も精良ではなく一般土器の ものと同じで、器壁も比較的厚いことからB系技法である。逆に63は、まず胎土がやや精良なもので、 外面調整も全体にハケ目痕が残っているものの脚柱部に細密横ミガキが施されている精製品である。 形態は比較的太くなり、屈曲部の稜は丸みを持ち、D系高坏である。64の高坏は、62と同様に胎土や 器壁、坏部形態から、さらに外面の板ナデ調整法からB系といえる。狭い水平の坏底部などはC系高 坏の影響だろう。

このSW02の時期幅は、以上のようにIB期からⅢA期まで存続した可能性があるが、なかでもD系甕に代表されるようにⅡ期後半にかかるものが多数を占める。器種構成はやはり甕類が最も多いものの極端な差はなく、土器系統も器種全体に見られるB系技法を中心に、甕や小型精製器種にC、D系が目立ち、そして他の系統も少なからず見られ、他の遺構とも同じような在り方を示している。

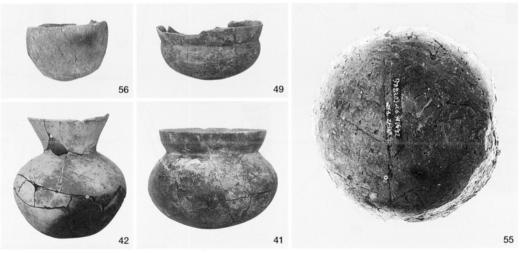


Fig.79 SW02の遺物

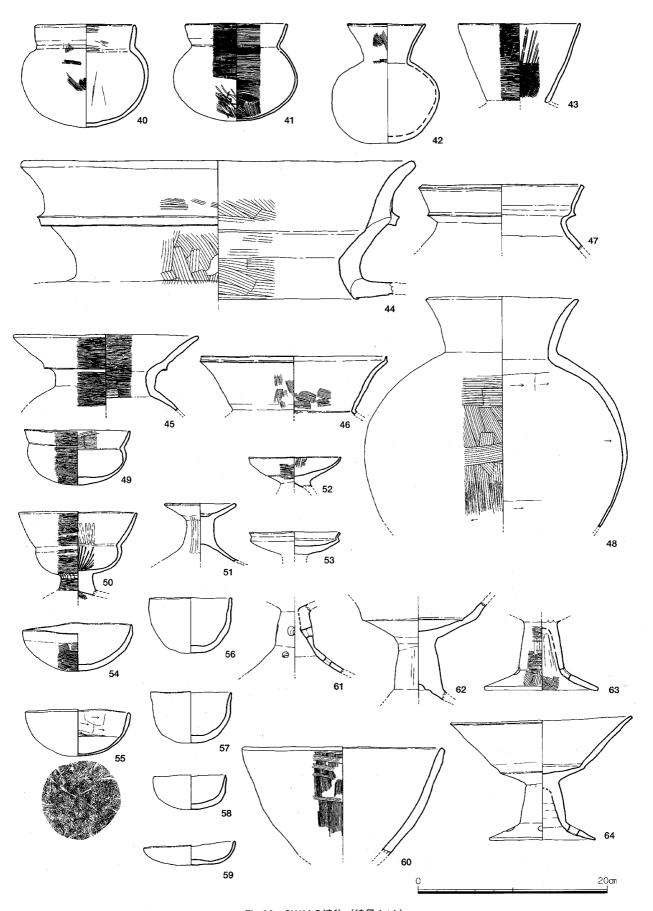


Fig.80 SW02の遺物(縮尺1/4)

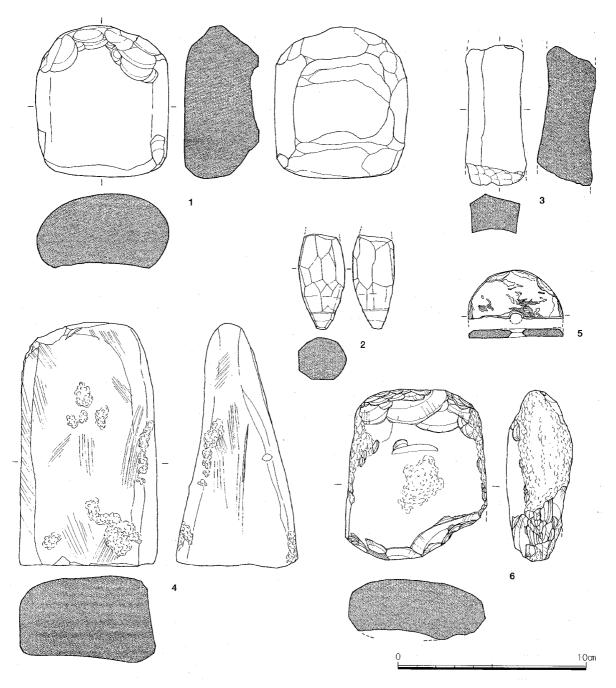


Fig.81 SW02の遺物(縮尺1/2)

石製品 1は両端が折れた磨製石斧の一端を研磨している。磨り石か。現在長8.0cm、幅7.1cm、厚さ3.95cm。2の石材は砂岩。長さ5.0cm、径2.5cm。横断面は多角形。一方を尖らせ横に浅い沈線が入る。小さいが穿孔具とした。3は長柱状の砥石。断面は五角形で各面が研ぎ面として使用している。4は自然石を用いた砥石。研ぎ痕が残っている。5は直径5.1cmの紡錘車。中央の孔は両面から穿つ。6は長台形扁平斧。身から頭部にかけて細かな殴打を加えている。刃部を欠くが側縁は刃部に向かって幅を増す。

Fig.85 木製品の出土状況

Fig.86 木製品の出土状況

木製品 1はカシの柾目板を加工した平鍬。柄孔から上部を欠いているが、柄孔は長方形であろう。 柄孔長側壁の痕跡からすると裏面から柄を挿入したとも考えられる。柄孔の角度は上辺と下辺で角度 が異なり、少し「遊び」を持たせているのが通常である。また絶えず着柄していたのではないので、 この角度の違いを利用して逆方向から柄を挿入、着装したことも考えられる。ただし安定感は犠牲に なったことだろう。

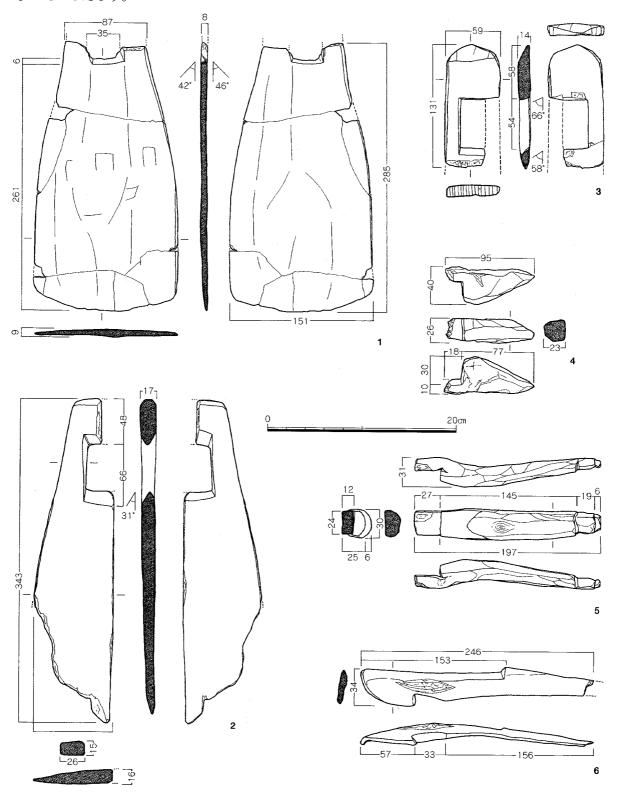
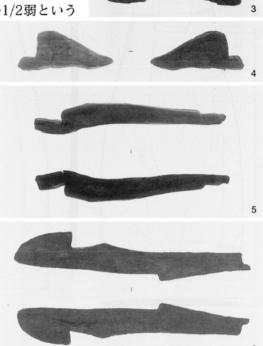


Fig.87 SW02の遺物(縮尺1/4)

身に肩はなく緩やかに幅を広めながら先端に向かう。刃先は直線ではなく丸みがある。身の厚さも均一で、刃先付近で次第に薄くなっている。2は縦半分が割れた平鍬、刃先も欠いている。角張った頭部から1と同じように緩やかに延び、刃先近くで狭まるのであろう。柄孔は長方形で、柄との角度は31度と鋭角となる。1に比べ全体に厚みのある作りである。3は頭部と柄孔だけが残る。頭部は山形に両側から削り、さらに表側からも削っている。柄孔は短辺が長辺の1/2弱という

縦長の長方形。上辺の角度は66度、下辺の角度は58度。4~6は鍬柄の組合せ具で、ここでは栓と呼ぶ。4は短い三角形で、段も短い。5は長めの栓。本例の特徴は湾曲し柄との間で隙間を作っている。また段と反対端部に柄と緊縛するための幅広の溝を作り出していることである。泥よけ具を装着する場合は、6のように一段削り取り空間を作り出すことが多いが、本例のように湾曲した例は初出土か。段側内面にピン(楔)を挿入した痕跡はない。また紐痕も残っていない。6は組合せ式柄の先端部。木材の中に紛れ込んでいたために取り上げが遅れ乾燥させてしまった。博多区那珂久平遺跡などの出土例とよく類似しているが、本例が異なるのは、泥よけ具を挿入する隙間が柄側にも加工されていることである。柄側にこの加工があると泥よけ具を装着しない時は隙間ができるが余計な心配か。



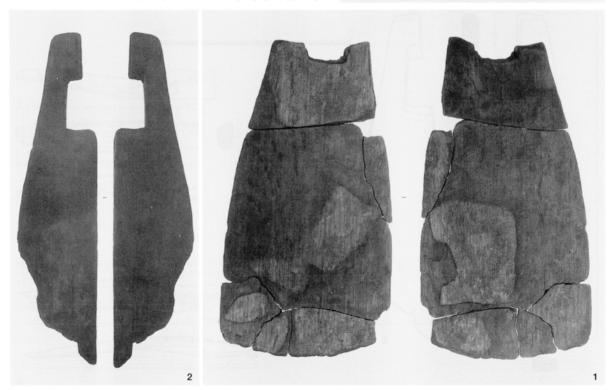


Fig.88 SW02の遺物

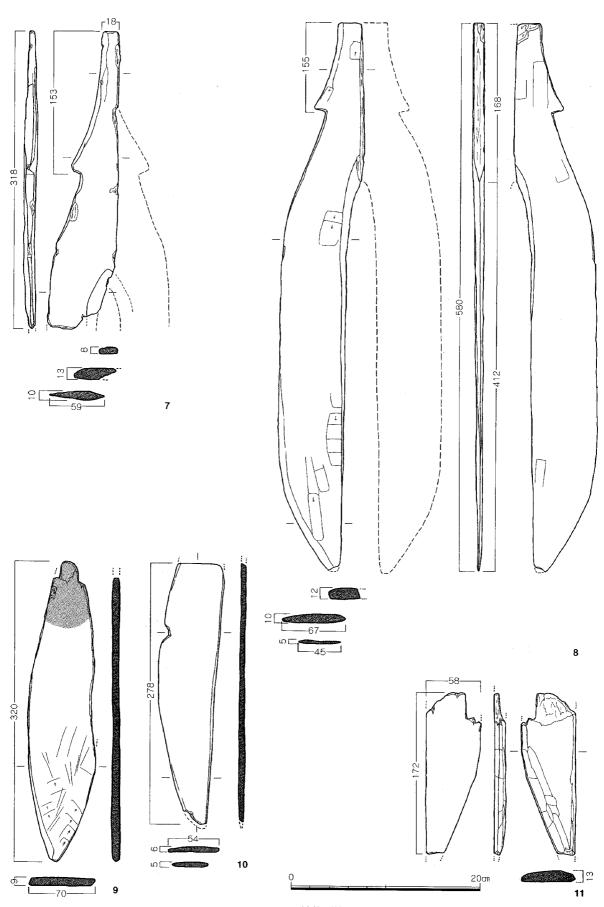


Fig.89 SW02の遺物(縮尺1/4)

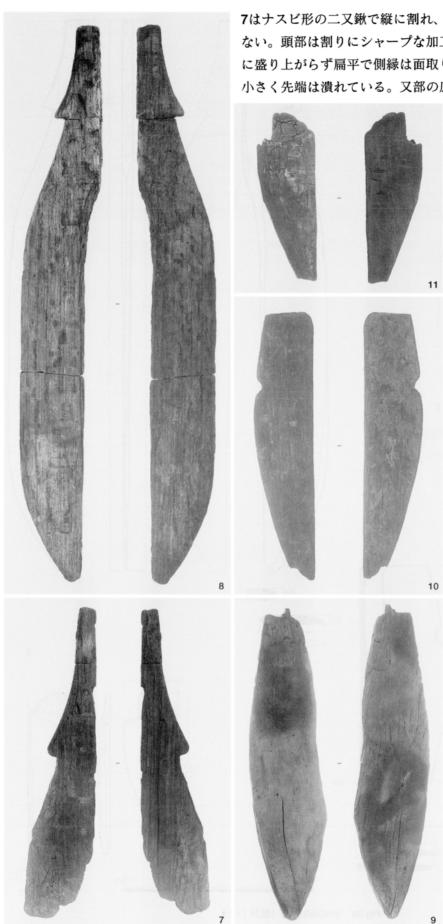
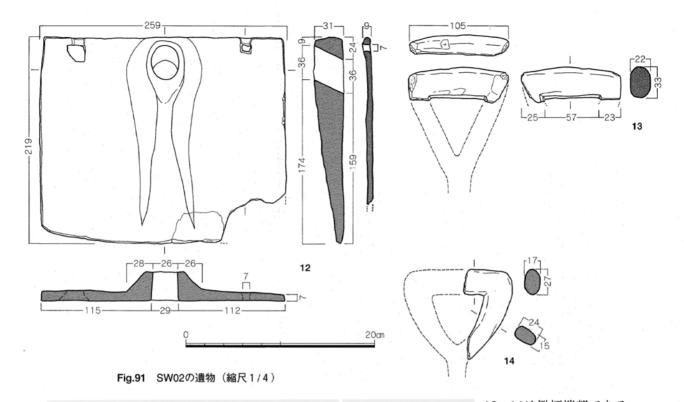


Fig.90 SW02の遺物

7はナスビ形の二又鍬で縦に割れ、又部も一部しか残ってい ない。頭部は割りにシャープな加工が施され、断面は蒲鉾状 に盛り上がらず扁平で側縁は面取りしている。笠部の突出は 小さく先端は潰れている。又部の広がりは大きく拡がってい

ない。又部内側の刃部は 幅広く削り出している。 8は頭部を欠き、縦半分 に割れている。頭部端が 厚く、刃先に向かって少 しずつ薄くなっている。 又部は並行して長く延び、 先端で内側にカーブする。 9は二又鍬の刃先部と判 断したが、形状は柳葉状 であり、側縁の削り加工 も通常の刃付け方と異な ることから別の用途を考 えるべきか。10はやや薄 い作りだが、二又鍬の片 方の刃先とした。側縁に 三角形の抉りがある。内 側の刃部が鈍いのも気に なる。11は逆に厚みがあ り、別用途か。図左の面 は火熱を受けて炭化して いる。12は横鍬でやや横 に長い形状で刃先がわず かに幅が広い。柄孔は縦 に長い円形。隆起部の横 断面は台形であるが稜線 は鈍く、丸みを持たせて 削り出している。頭部長 辺の両側には方形孔があ り、紐擦れ痕が残ってい る。同じような横鍬が第 3号凹地SW03から出土 している。細部に違いは あるが本例の方が厚みの ある作りとなっている。



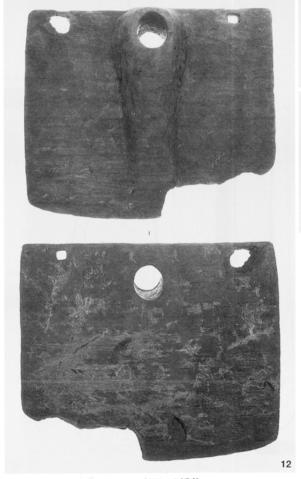


Fig.92 SW02の遺物





13、14は鋤柄端部である。 13は三角形か半円形の形状 の握り部。断面形は縦長の 楕円形で保持しやすい工夫 をしている。14の透かしは 丸みのある三角形。握り部 は楕円形で、Y部は断面長 方形に細くなっている。13、 14ともに丁寧な加工であ るが削り痕はなく、長期の 14 使用で滑らかな表面となっ

ている。15は山形の刃先が3本あることからエブリとした。身のかすかな湾曲から図を手前側とした。上縁は弧状で側縁に延びる。柄孔は円形で手前側の径が当然小さい。この柄孔を中心として反転復元すると6本歯となる。ただ横幅が狭く、エブリとしてはきわめて小型。側縁も通常の形状と異なり再加工品か。16、17は掘り棒状の木製品。16は板材から長い柄と身を削り出している。身は斜めの肩から直線的に刃先に窄まり刃先を作る。刃先は尖っていないが、肩は斜めで踏み込むには適していないことから掘り棒とした。しかし側面で見ると図右は柄から段がなく身となるが、図左は身になって刃先に向かって薄くなっている。

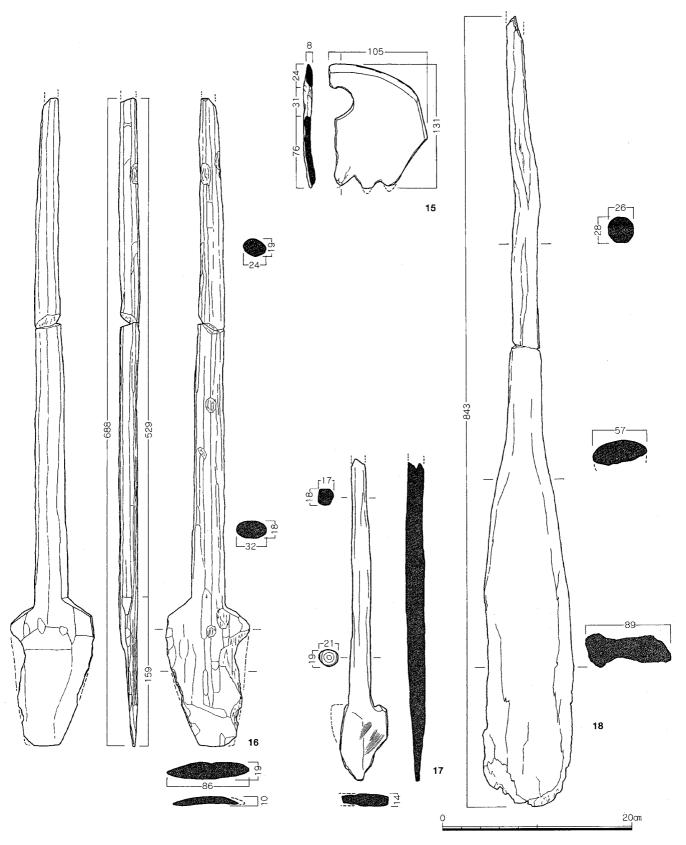
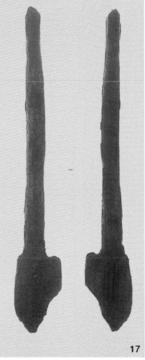


Fig.93 SW02の遺物(縮尺1/4)

があり使用によって摩耗しているが図下端はやや尖り気味。両方の搗き部とも横断面は正円に近く、握り部は楕円形である。搗き部から握り部へかけて削り痕が明瞭に残り、削り方向も観察できる。削り方向を矢印で示しているが、搗き部中程からは握り部方向へ、搗き部端部では向きを変えて先端方向へ削っている。20も広葉樹の芯持ち材。搗き部と握り部とには境を付ける。全面に削り痕が残り、最初に両搗き部を削り、その後で握り部を削っている。搗き部端は図下が丸みがあり、図上は平坦に近い。どちらも摩耗しその使用回数が多かったことを物語っている。握り部の断面は楕円形、また中心軸がゆがんでいる。21は19、20に比べ短い。広葉樹の芯無し材。搗き部端は一方が丸で、他方が平らである。どちらもよく摩耗している。搗き部から握り部は次第に窄まり明瞭な境がない。図上端の搗き部は端部が最も幅広い。これは平ら

な搗き部の作業目的からできる限り 搗き面積が必要だったからだろう。



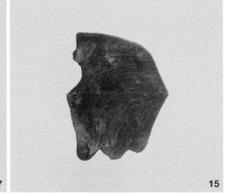


Fig.94 SW02の遺物

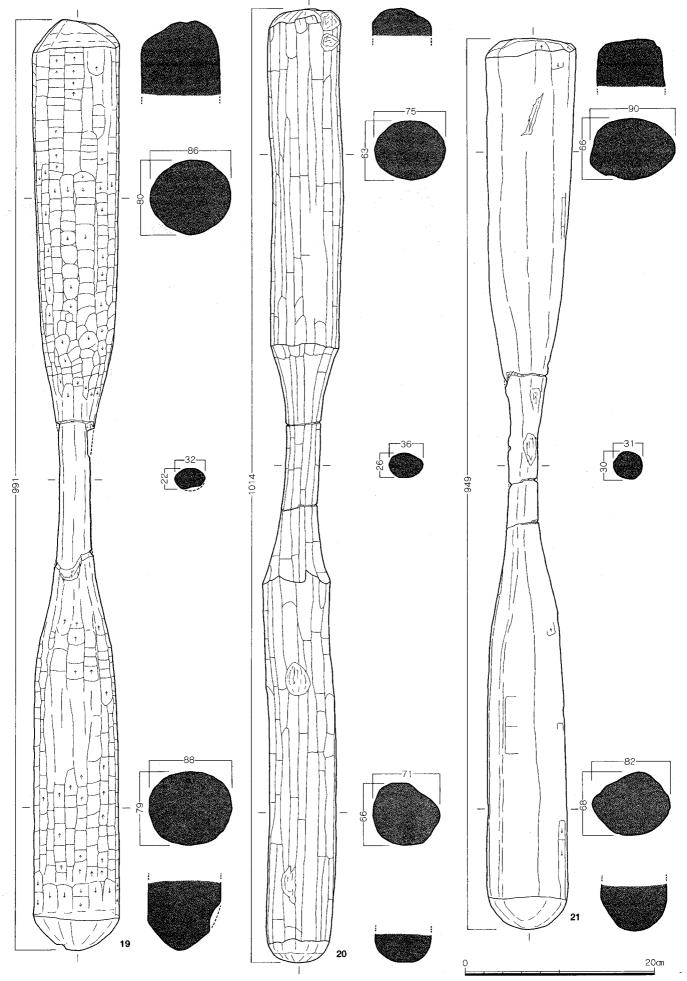


Fig.95 SW02の遺物(縮尺1/4)

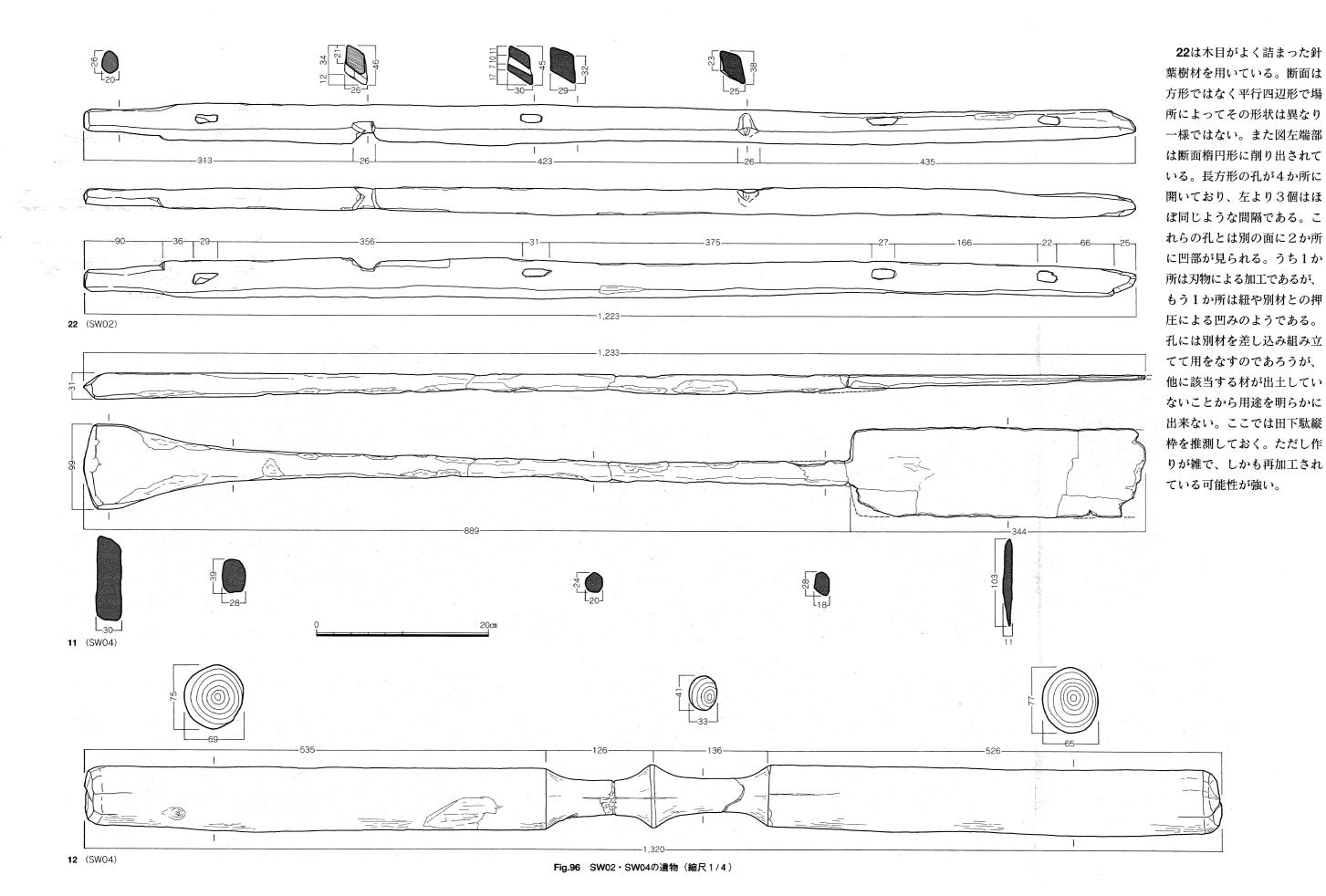




Fig.97 SW02・SW04の遺物

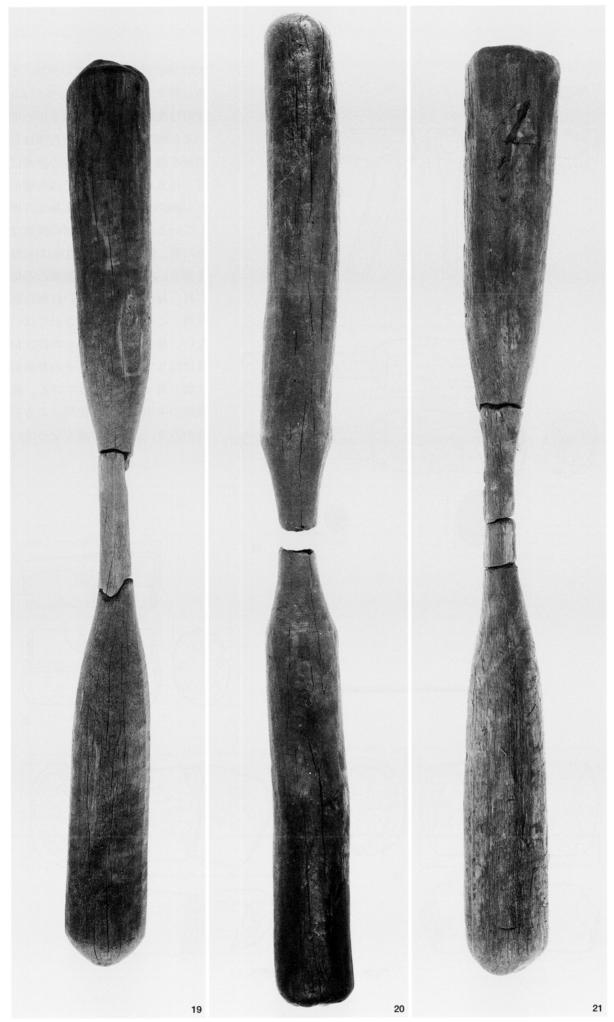


Fig.98 SW02の遺物

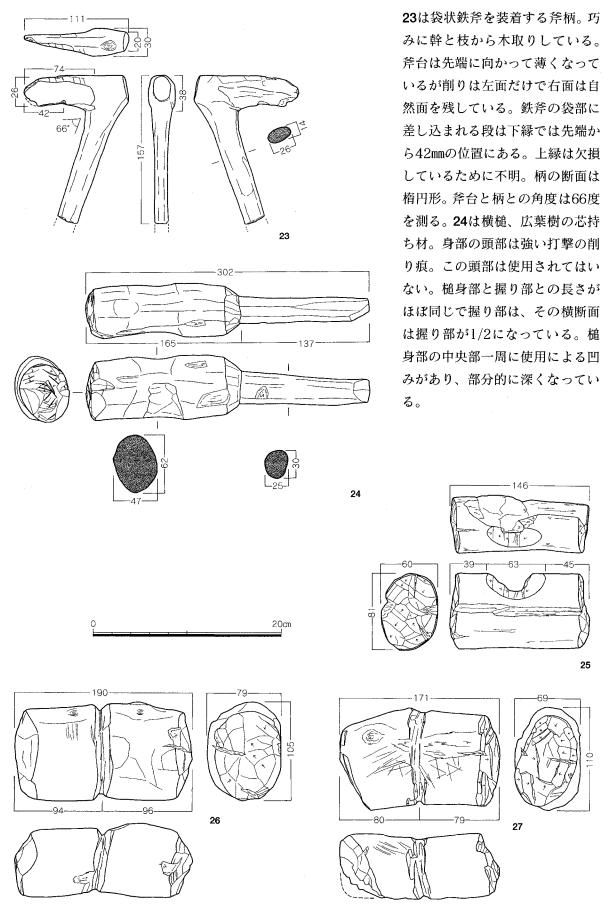


Fig.99 SW02の遺物(縮尺1/4)

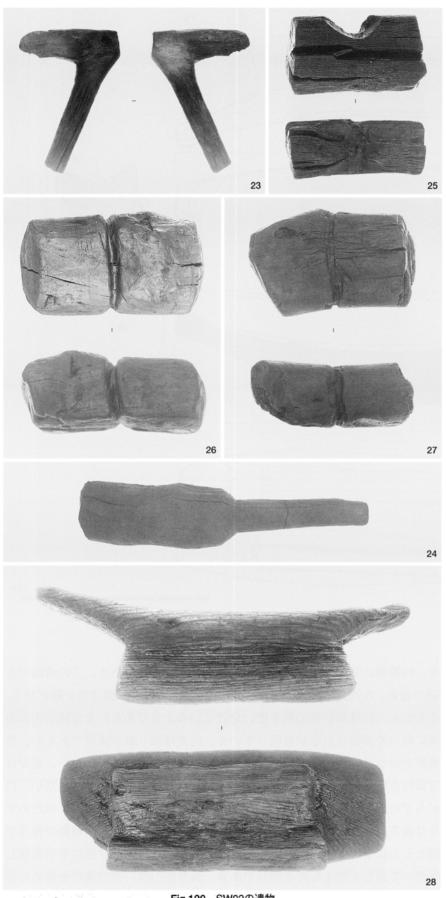


Fig.100 SW02の遺物

25~26は木錘。25は乾 燥でひび割れ、扁平とな っているが、これは取り 上げ後の保存管理が悪く 乾燥させてしまったこと による変形である。中央 の抉りは左右から刃物を 加えている。通常はこの 抉りは1周するものであ るが、本例では一部だけ にとどまっている。26は 広葉樹の芯持ち材を切断 している。その切り口は 削り痕が明瞭に残ってい る。中央の溝は抉り取る のではなくV字状に切り 込まれている。本例も取 り上げ後に乾燥した。27 は広葉樹の芯持ち材。屈 27 曲した部分を使って加工 している。中央の溝は真 上から刃物を振り下ろし ている。28は針葉樹を横 木取りした刳り物の腰掛 け。SW01でも腰掛けが 出土しているが、同じよ うに長方形の座板で裏に は長軸に並行する二つの 脚がハ字形にふんばって 付いている。座板上面は 尻に合わせて両端が反り 上がるようになっている が、この湾曲度はSW01 の腰掛けよりも弱く、下 方への折り返しもない。 全体的に厚みのある作り で、実用方位の道具の印 象を受ける。29~31は容 器、あるいは容器の蓋と 思われる木製品。29は広 葉樹の板目材か。

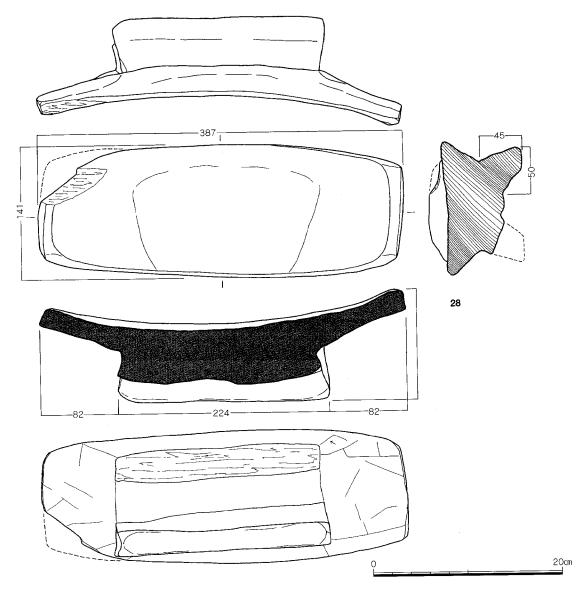


Fig.101 SW02の遺物(縮尺1/4)

幅5cmの長方形に割れており、短軸側に湾曲し、その両端内面には帯状に厚みがある。この湾曲のま ま復元すると直径約15cmの筒となる。内外面と細かな削り加工が行われている。外面は削り幅が狭く、 内面は削り幅が広めであることから、何種類かの工具を使い分けているようである。また両端内面の 凸帯部は幅の狭い工具で湾曲に沿って面取りしながら削っている。内面は削り痕が顕著であるが、外 面は滑らかである。30は広葉樹を使っているが全体に腐食が進み加工痕はよく残っていない。蓋受け の立ち上がりがあることから蓋付き容器の身と推定した。立ち上がり部を垂直に作図すべきだが、円 形に湾曲した身にわずかながら平坦面がありここを底部とした。やや傾いた図となるのはこのためで ある。残っている立ち上がりは高さ約1cm、幅約3mmで、大胆に想像すると割り竹状の容器が復元で きる。類例が少ないだけに29とともに原形が明らかでないのは惜しい。31は取り上げ後にやや乾燥し て変形しているが、針葉樹を使って美しく加工した木製品である。長方形の厚い材の端部を斜めに切 り落とし、底広の刳り抜きをしている。この刳り抜きは、幅広の縁を設けた内側から端部の切り落と

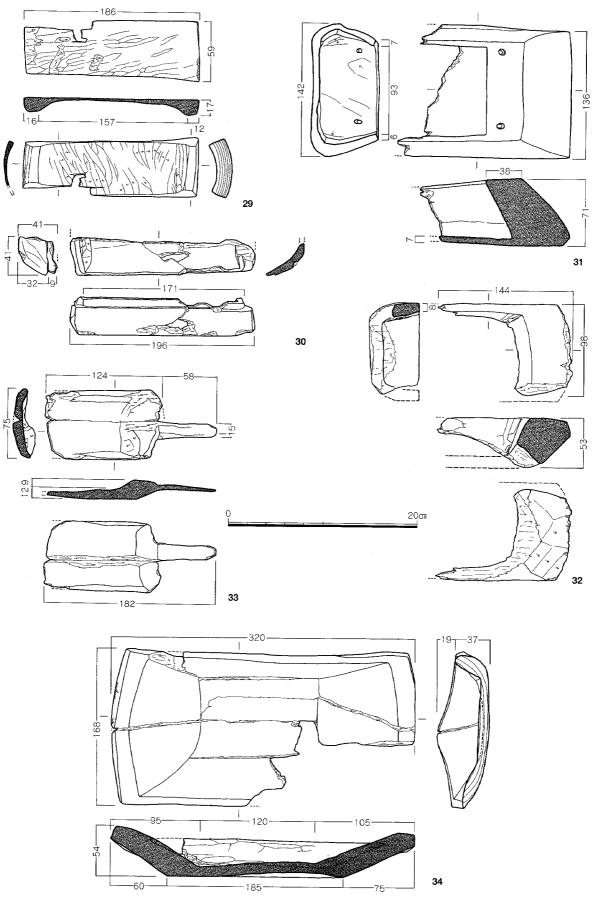


Fig.102 SW02の遺物(縮尺1/4)

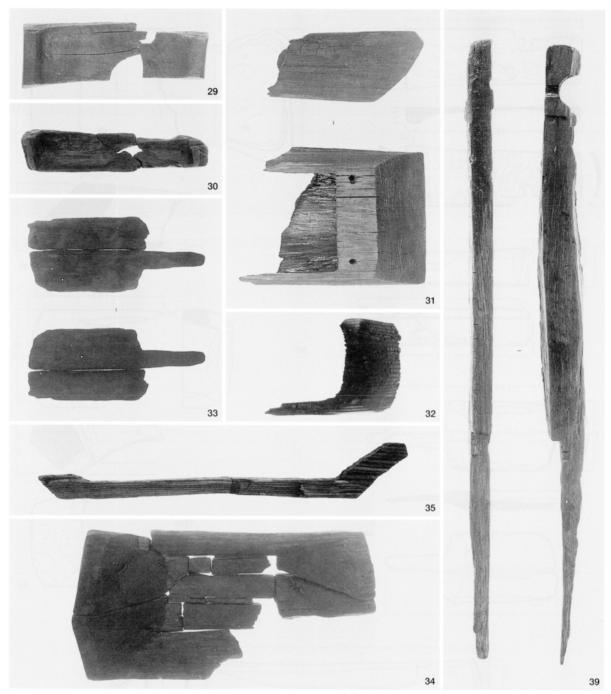


Fig.103 SW02の遺物

し角度と同じように斜めに掘り込んでおり、その上面に縁には内側に貫通する2個の小孔がある。本例も類例を知らない。32は幅10cm前後の長方形の木製品。図左部は火熱で炭化している。端部と刳り抜きの方向は31とは逆で、内側に向かって斜め方向である。残存部の加工は丁寧で、滑らかな面となっている。形状から小形の槽とした。33は広葉樹の柾目材。割れて残存部も腐食が激しく原形を留めていないが、現在は長方形に浅く刳りぬかれた身に長さ18.2cmの柄が付いている。身の横断面はわずかに湾曲し、内面の刳り抜きは1cm程度の深さしかなく、身が横方向に湾曲しているために、側面との高さは5mm程度となっている。両端に柄が付く形状も考えられるが、ちり取りのように一方が開いた形状で、物をすくい取る機能とすると深さが足りないようだが、豆類や稲粒、粉などには以外と

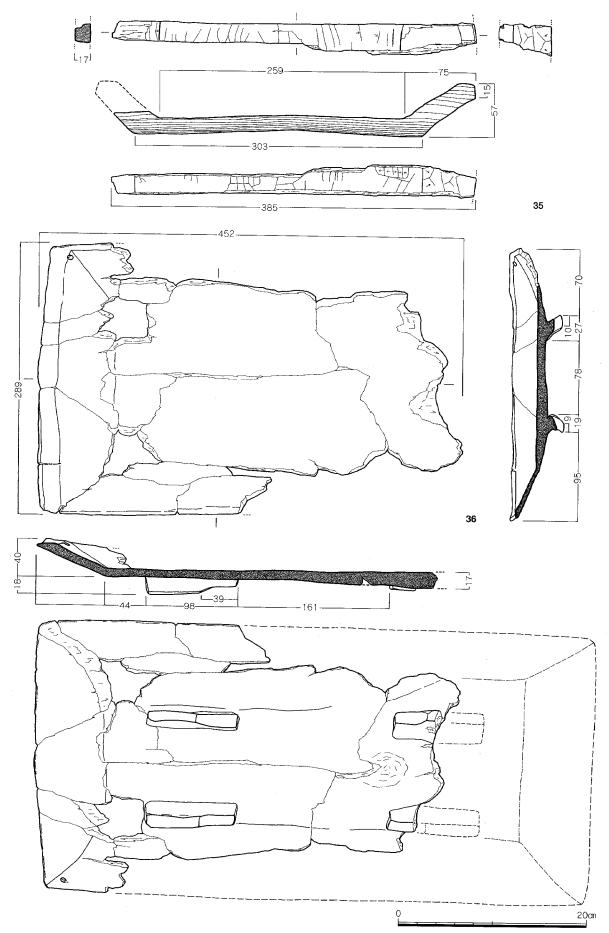


Fig.104 SW02の遺物(縮尺1/4)

適していたかも知れない。34~36は大きめの槽。34は長方形で短辺側が直線ではなく中央が丸く膨らんでいる。縦の断面は低い逆台形に刳り抜かれている。横の断面で見ると底部は平坦でなく微かな湾曲を持たせ、かつ短辺も山形に盛り上がっている。形状を美しく見せようとする造形意思が読みとれて単純な形状ながら心地よい。35は幅約5 cmの破片。その断面から長方形の槽とした。内外面とも長軸方向の丁寧な削りが施されている。36は横木取りした長方形の槽。両長側辺の一部と短側辺が残っているにすぎないが、底面に削り出された4個の脚の位置から元の大きさが復元できる。短側辺は大

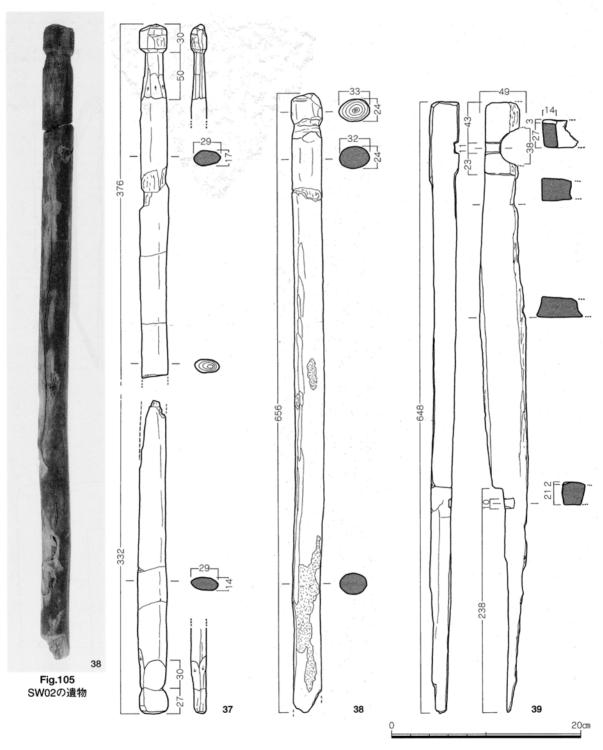


Fig.106 SW02の遺物(縮尺1/4)

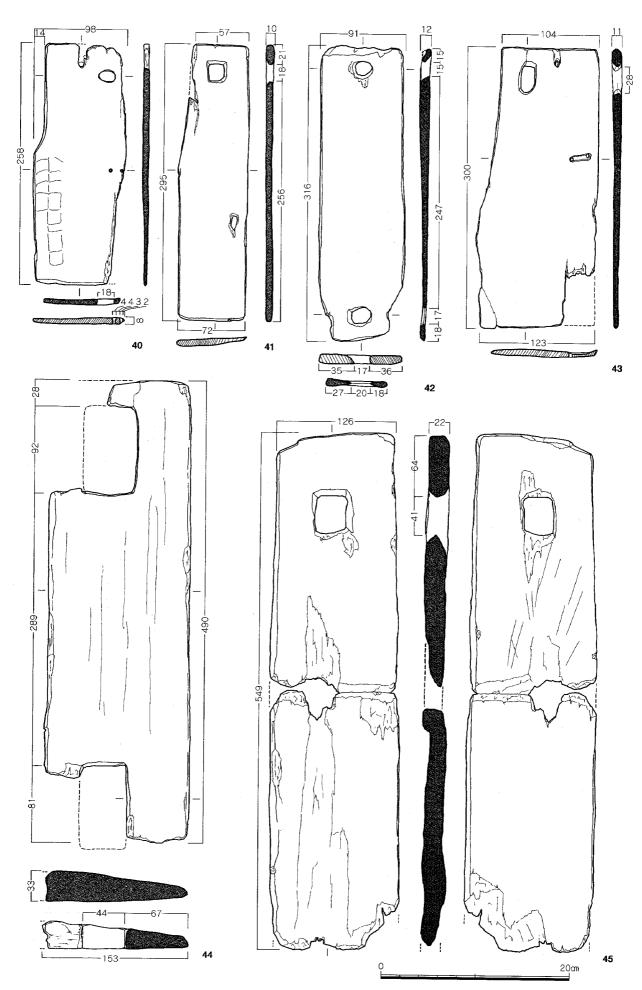


Fig.107 SW02の遺物(縮尺1/4)

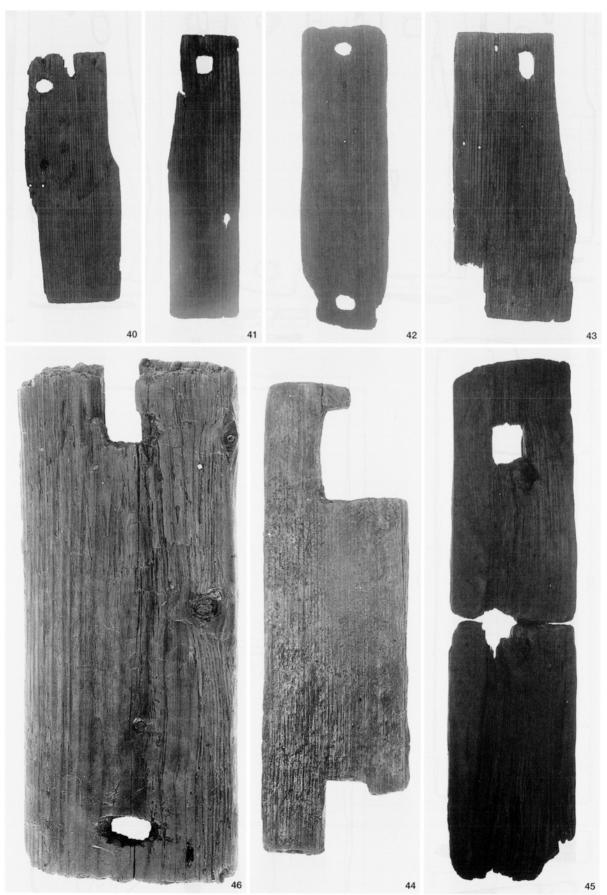


Fig.108 SW02の遺物

きく開き、その分浅くなっているが、脚の高さでバランスが保たれている。脚は底面の長軸中心線に対して並行に配置されており、全体にきわめて巧みな細工である。37、38は棒状の端部を加工した木製品。32は同一材であるが途中が失われ接合しない。中央部の断面は楕円形。図上端は削りで頭部を作り、図下端は端部に向かっての削りで頭部を作らない。38は樹皮が残る丸太材。同じように頭部を作っており、溝状の括れ部には紐擦れのような痕跡が観察できる。39は針葉樹の板目材。図上端と下半に加工がある。溝状の加工は別材を組み合わせたものか。割れており用途不明。

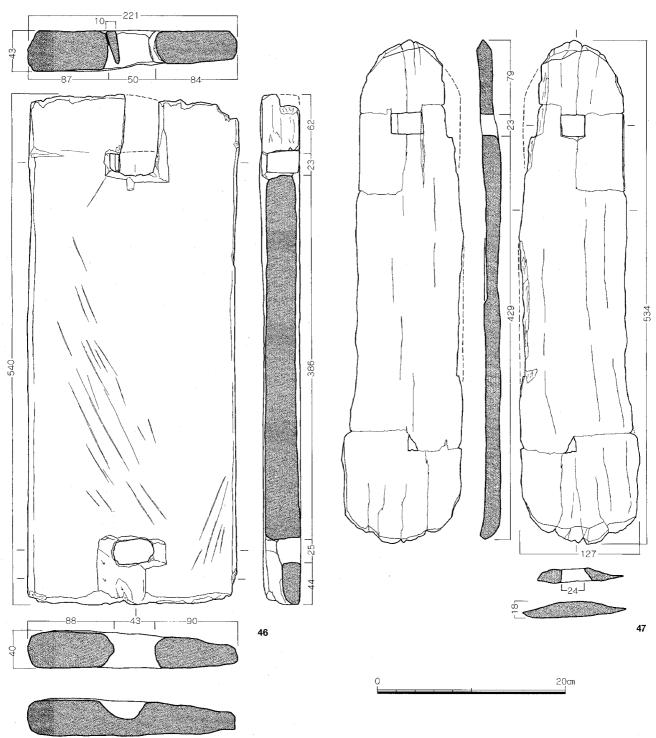
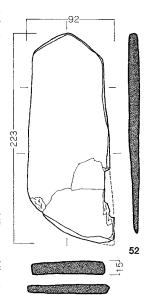


Fig.109 SW02の遺物(縮尺1/4)

40~47は方形孔を持つ板状の木製品である。40は針葉樹の柾目材、薄い板材で一部に削り痕が残る。図上端の右に片寄って横長の孔がある。中位の右端には2個の小孔が穿たれている。組合せ材だろう。41はほぼ原形を保っている。長方形ではなく図左側辺が斜めに切断されている。2孔あるが中位の孔は人工的かどうか不明。図上端の孔は整った方形をしており、角材を差し込むのであろう。42は両端に横楕円形の孔が開いている。孔の壁は直ではなく両面から穿って「く」字形の断面となっている。図下端側は側辺が括れ、両側面は摩耗して角も取れてる。43は針葉樹の柾目材。形状は40と同じように側面がカーブしている。図右端の中程に2個の小孔が溝で繋がっている。曲げ物の側板組み合わせで同じような工作があることから、曲げ物かと推測したが、図上端にも大小の孔があり、別の用途であろう。44は4cm×9cmの方形孔がある。広葉樹の柾目板で図左側が厚く、右に向かって薄くなる。建築部材か。45は厚みのある板材で、図上端に方形の孔がある。厚さは均一で



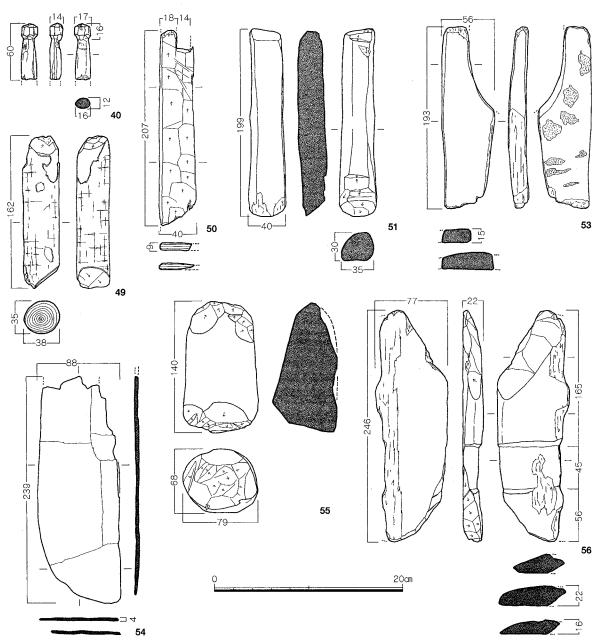


Fig.110 SW02の遺物(縮尺1/4)

はない。一部に刃傷が付いている。46は厚みを整えた板材で、腰掛けの座板と考えた。両端に $2\,\mathrm{cm}\times4\,\mathrm{cm}$ の長方形孔が開いている。この $2\,\mathrm{dm}$ の孔は長軸中心線に対し直交しており、図上端の孔には楔が残っている。楔は $2\,\mathrm{cm}\times3.5\,\mathrm{cm}$ の長方形で、両端の厚さは $1\,\mathrm{cm}$ と $0.5\,\mathrm{cm}$ で打ち込みやすいように一方を薄く削っている。ここに脚板を組み合わせ楔を打ち込み補強を図ったのだろう。座板上面には内傷があり、ある時は工作台としても使用したか。47は広葉樹の板目材。厚さ不均一の板材で図上端側に方形孔を穿っている。孔の壁は直だが一辺だけ斜めに掘り込んでいる。用途不明。

48~56は用途不明の木製品。48は細い棒の一端を弓弭のように加工している。削りによって括れを作り、その下方には浅い溝状の窪みがあり紐を結んだか。49は樹皮の残る丸太材の両端を削り切断

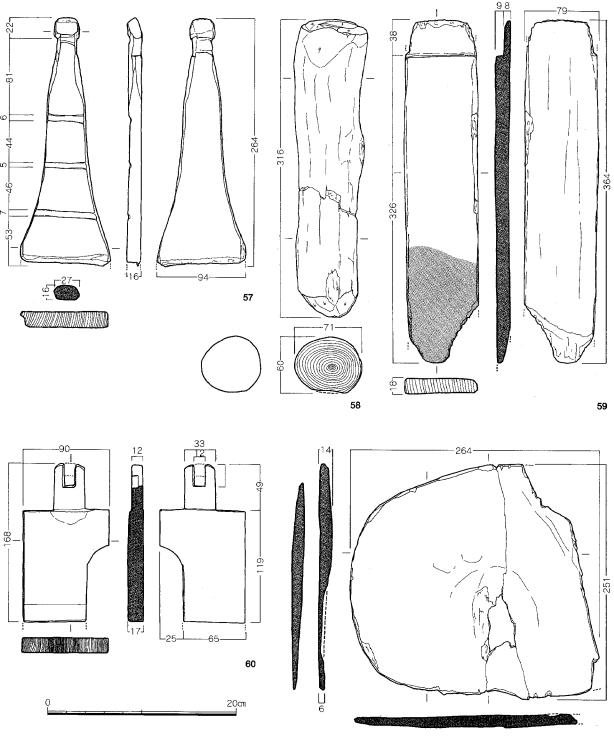
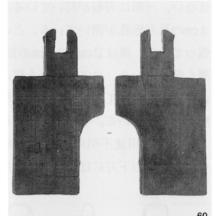


Fig.111 SW02の遺物(縮尺1/4)

している。どちらかが後の再加工かも知れない。50は針葉樹の板目材。図上端に方形孔のような加工がある。表面のみに削り痕が残り刃傷が数本ある。51は長さ約20cm。断面は不整形。両端に浅い段がある。図表裏面は割りに平坦で側面は丸みがある。52の周囲は削り面取りしている。図下端は弧状になり、片面からの削りで刃部のようにも見える。図表裏面ともに微妙な凹凸がある。53は左図右上は丸く抉られているが他の側辺は原形かどうか判断できない。又鍬の一部のようにも見えるが刃の付け方が異なる。54は2~3mmのきわめて薄い板材。図左側面は鈍く尖り下端ほど摩耗して面となっている。



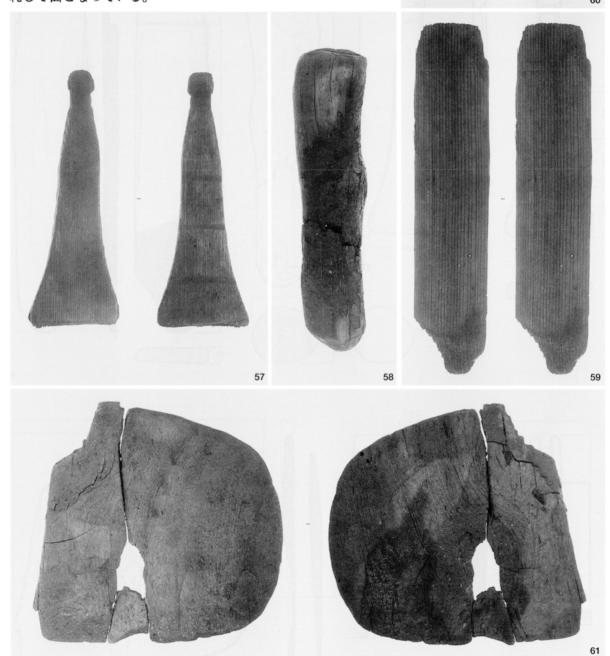


Fig.112 SW02の遺物

55の図下端の切断痕を見ると竪杵搗き部と類似している。横断面も同じように円形であることから竪杵の再加工品とも思える。56は広葉樹の柾目材。左図には段のような加工があることから、履き物のような機能を考えたが、段があまりにも低く、足に固定する工夫も特にないので別の用途だろう。57は板材を背の高い三角形に加工している。その頂点には丸みある頭部を作っている。左図のみに4本の段があるが、これは削り加工ではなく、何かを押し当てた痕跡である。頭部の作りから別材に挿入する組合せ材と考えたが、片面の押圧の段が説明できない。58は広葉樹の芯持ち材。図上端の切断が竪杵によく似ていることから転用と推測したが、中心軸がやや湾曲しているのが気になる。一部が火熱を受けて炭化している。59は針葉樹の柾目材。全体に平滑に加工されており、図上端には段がある。同じように段を持つ板材と直角に組み合わせる方法も検討したが段の長さが短すぎる。他材に差し込むような組合せなのだろう。60は雀居遺跡第4次調査で初めて明らかになった組合せ式机の脚部。柾

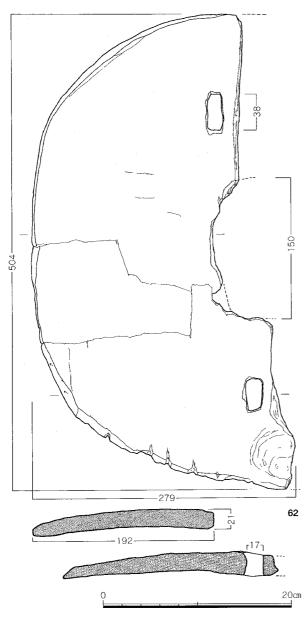


Fig.113 SW02の遺物(縮尺1/4)

目材で木目がよく締まっている。その木目は 相当大きな材から木取りしたことを示してい る。組合せの方法は第4次調査例と同じだが、 机天板に差し込む頭部の作りや脚の側面の抉 りなど細部は異なることが多い。全体的に直 線的で鋭利な作りとなっている。脚下部を切 断していることから、別の目的に使用したの だろう。61は楕円形で薄手の作りから鍬の泥 よけ具の未製品を想定し、図のような天地と した。縦断面は上部が厚く下部に向かって次 第に薄くなる。横断面は図の手前側にわずか ながら湾曲している。中央線下半に欠損部が あるが、これが柄孔の位置とすると図天地逆 となり、また左右対称でなくいびつな形状と なる。やはり別用途を考えるべきか。62は高 床式建物の柱に装着した鼠返し。やや楕円形 の形状で中央部が厚く、外縁に向かって薄く なっている。図裏面側に湾曲し柱を登ってく る鼠を防いだのだろう。柱を通す中央の孔は 元は15cm程の方形だったと思われる。側縁の 腐食と比べると、その度合いが強く、あるい は再加工して転用した可能性もある。とする と図右端上下の長方形孔が、当初のものか転 用時の加工かが問題となる。鼠返しの大きな 材を確保できずに半円で製作し、2枚の部材 を連結、緊縛する目的だったのか、あるいは 途中で割れてその補修孔として開けたのか。 長方形孔が中心線からズレて並んでいること からすると補修孔か転用後の可能性が高い。

るわけではない。その分遺物の出土は少なく、実 測したのは土器1点と木製品4点である。

出土遺物 土 器 1はやや尖り気味の丸底。薄 い器壁の作りで、外面の調整は細かな縦ハケ目、 内面は削りで底部近くは指押さえ。胎土に1mm大 の砂粒を多く含んでいる。内外面の色調は茶褐色。

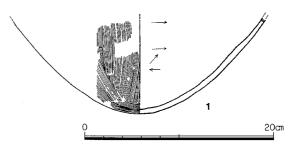
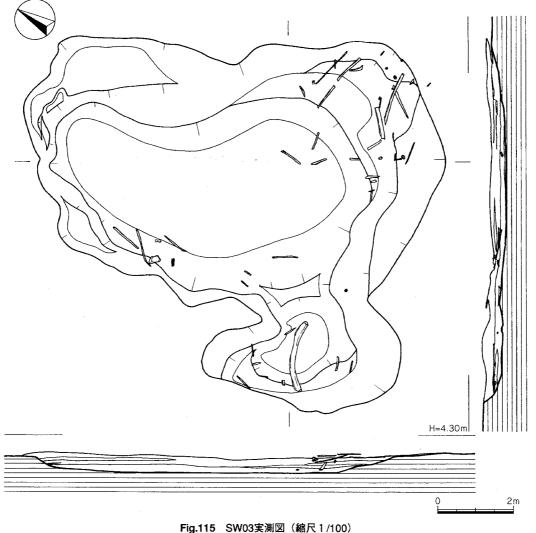


Fig.114 SW03の遺物(縮尺1/4)



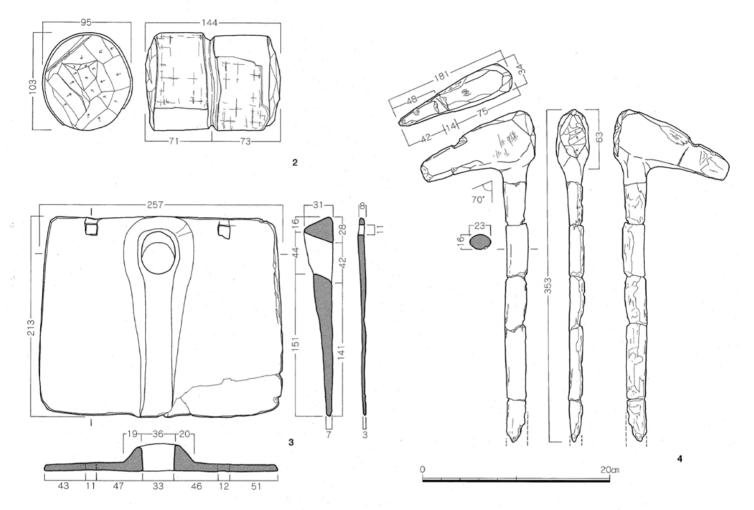


Fig.116 SW03の遺物(縮尺1/4)



木製品 2は木錘。樹皮が付いた丸太材を切断し、中央に幅の狭い溝を1周させている。全長が短いのが特徴。3は横鍬。前にSW01出土の横鍬とよく類似していることから比較したが、本例の隆起部は明瞭に盛り上がりその稜線もシャープである。隆起部の確かな工作に対し、身はきわめて薄い。柄孔の両側の方形孔には紐擦れ



Fig.117 SW03の遺物

で摩耗している。実際に泥よけ具が装着されたことを示している。裏面には泥除け具を受け止める段はない。4は袋状鉄斧を装着した柄。幹側の斧台は先端に向かって尖り気味に削り、先端から4.8cmにわずかな段がついており、ここまで袋状鉄斧が入ったのであろう。柄は数片に折れ元の長さは不明。断面は楕円形である。5は鼠返しの完形品。本例はSW03の縁より上がった南西側で出土した。砂質土に覆われておりSW03から溢れ出たような状況であった。形状は隅丸方形で中央に直径14.2cmの柱孔が開いている。広葉樹の分厚い材で、断面はわずかに湾曲し、周囲に向かって薄くなる。鼠返しの機能からすると図は地面側であろう。SW02出土の鼠返しと比べると大きさよりも材の厚さに目を奪われる。

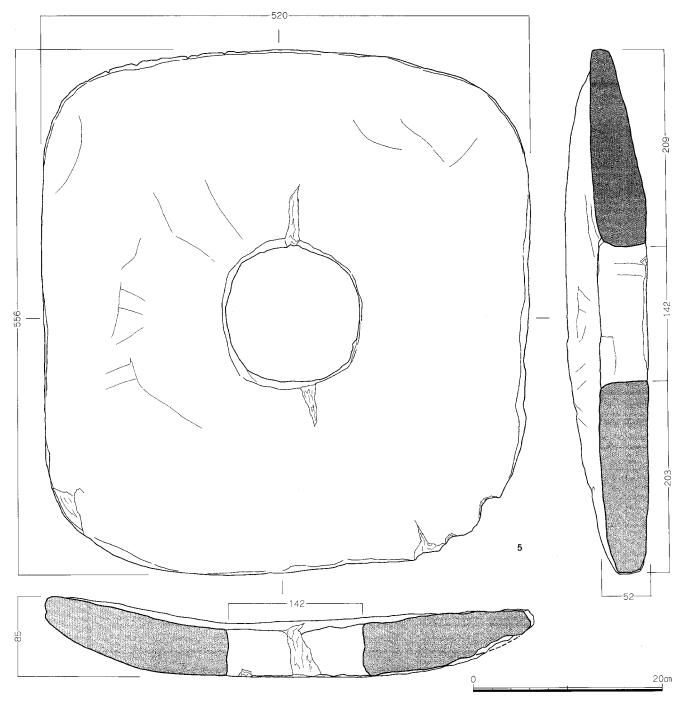


Fig.118 SW03の遺物(縮尺1/4)

6. 方形周溝 (SR)

第1号方形周溝SRO1 R31グリッドに位置する。であり、一端は発掘区外に入り、もう一方は途切れたために方形周溝の遺構名を与えていない。第12次調査によって全形が現れ、ようやく方形周溝と認定した。南北が対角線軸となる方形で、溝の幅は約70cm、断面は逆台形で深さは25cm前後。北東隅で溝は上がり陸橋のように開いている。区画された内側には大小のピットがあるが、埋葬施設とは思えない。またこれらピットも同時期か判断できない。南隅に弥生時代後期終末の土器4個体分が出土した。雀居遺跡では第5次で発掘されており、本例よりも一回り大きく、弥生時代後期後半の土器や木製品が出土している。

第1号方形周溝SR01 R31グリッドに位置する。第10次調査で溝の北側を発掘していたが、部分的



Fig.119 SR01土器出土状況

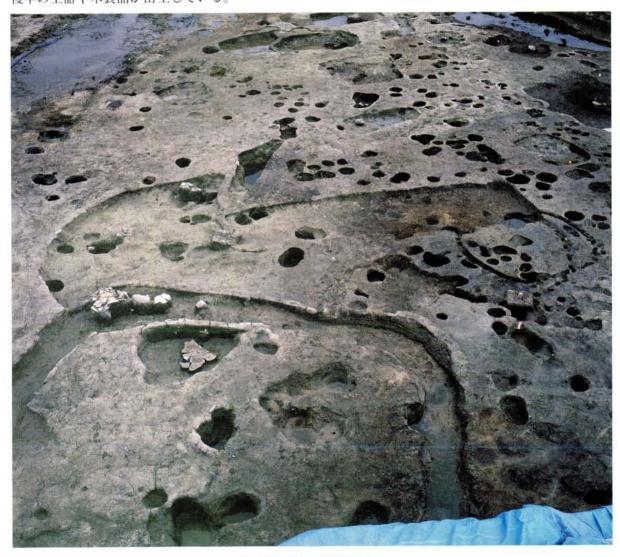


Fig.120 SR01 (北西から)

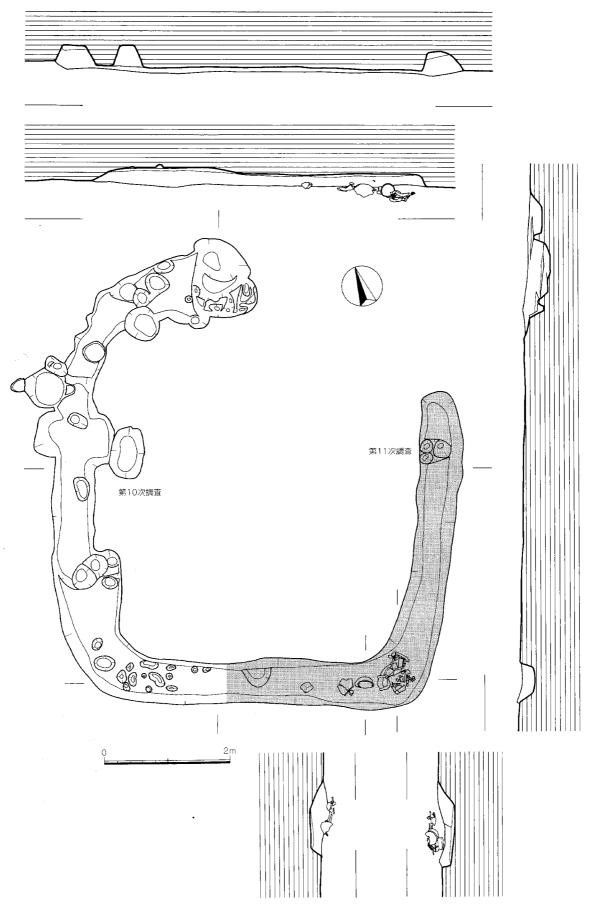


Fig.121 SR01実測図(縮尺 1/60)



Fig.122 SR01 (北西から)



Fig.123 SR01の遺物

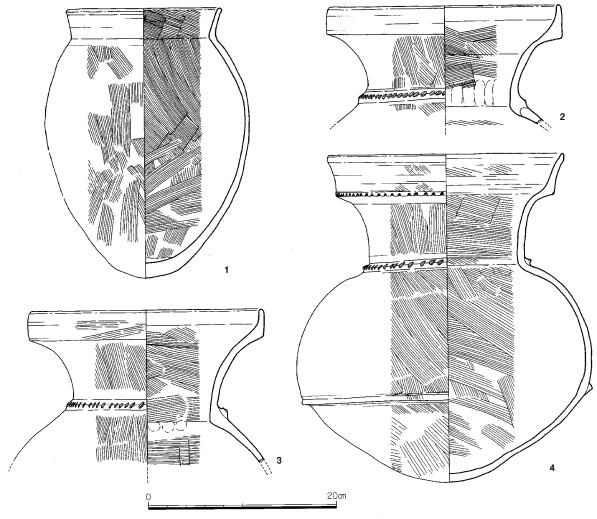


Fig.124 SR01の遺物(縮尺1/4)

出土遺物 土 器 1~4は古式土師器である。1の長胴甕は、内外面とも不規則なハケ目調整で在地 系 (A系) である。もともとA系器種は変異が大きく、時期も大まかにしか想定できないが、多くの 編年案はだいたいは胴部最大径位置と底部形態の2つの属性の組み合わせから各型式の変遷を示して いる。A系甕はⅡA期以降、法量が全体的に縮小し、頸部が次第に締まって、それにつれて形態も長 胴から球形胴へ、上位重心から中位重心、下ぶくれへ、底部は平底の名残りのあるレンズ底から丸底 に近いレンズ底や尖底、そして丸底へという傾向が見られる。1は胴部は中位重心、底部形態は尖底 である。やや大型で頸部もまだそれほど締まっておらず、時期としてはⅠB~ⅡA期辺りの可能性が 高い。2~4の二重口縁壺は、内外面ともハケ目仕上げで、胴部から二次口縁部までの屈曲部は比較的 なだらかで、頸部~胴部の屈曲部や胴下半に突帯が見られるなどの特徴からA系技法である。2と3は 形態的にも調整的にもよく似たものである。ただ2の壺の刻目突帯の成形は、他の3、4と違い、突帯 を貼付けるのかそうではないのか不明である。4は底部が尖り気味の丸底で、胴部外面下半は太筋タ タキによる成形である。A系土器は、時が経つにつれて丸底化し、調整も外面はタタキ技法が現れ、 内面はケズリ技法が出現する。外来のB、C、D系などの影響であろうが、このSR01の4つのA系 土器に関しては、4の壺に外面タタキ成形技法がわずかに見えるのみで、内面ケズリ技法などはまだ 出現していない。変異の大きいA系土器による時期決定は難しいが、時期的にそのような段階なのだ といえよう。